

城館史料学概論ノート1 —城郭跡からはじまる学際的研究の試み—

中 西 義 昌

今回掲載する「城館史料学概論ノート」は、2010年後期に別府大学大学院で行った同講義レジュメから構成したものです。

城館史料学とは、城郭遺跡を歴史研究の史料として用いる史料学としての城郭研究を目指す学問領域です。1979年に村田修三が「城郭遺跡を地域史と在地構造分析の史料として活用する」ことを提唱し、純張り研究が牽引役となって城郭研究は飛躍的に発達しました。その中で、千田嘉博や木島孝之らの理論先行型研究と多くの城郭研究者による調査研究の蓄積があって、自立した学問としての城郭研究、城館史料学の環境が整備されました。

「城館史料学概論」の前半部分（第1講～第6講）は、主に純張り研究を基礎とする城郭研究の発達とその理論的枠組みについて、先行論文の紹介を通して理解してもらうことを念頭に構成しています。院生にできるだけ当時の基本論文をあたってもらい、当時の学際的研究の中ででてきた城郭研究の雰囲気を感じてもらいたいとの考えもありました。そこで、キーワードとなる部分は積極的に引用し斜体文字で標記し、それに解説を加えるかたちで講義を進めました。

一方、「城館史料学概論」の後半部分（第7講～第14講）は、近年の城館史料学による研究成果に学びながら、その実践について具体的に紹介する構成となっています。

第1講 はじめに－顕彰から研究へ－ ～城郭跡の保存・整備と城郭研究の歩み～

第1講～第6講までは、様々な先行論文に触れながら城館史料学の世界を知るための基礎編となります。

まず、第1講では、

城館史料学とは何を目指す学問なのか？

なぜ、城郭跡から歴史を考える必要があるのか？

という問い合わせからスタートして、城郭の研究史を振りかえります。そして、過去はもちろんのこと、歴史学・歴史考古学が牽引役を担う今日の城郭跡整備・保存の現場においても城郭跡（城郭遺跡）を歴史資料として見る視点が不足してきたことを確認します。このことを踏まえて、「遺跡を文献史料などで解釈」してきたこれまでの研究姿勢に対して、純張り研究を主体とする城郭研究者から「遺跡そのものの読み込みから解釈する」方法論が提唱され、城館史料学へと展開してきたことを紹介します。

【1】基本的な概念と用語

※城郭の配置や構成を説明する上で用いられる用語……江戸時代の軍学用語が起源【図1】

△城郭の周囲を防御するための施設

曲輪（くるわ）……人為的に削って平たくした区画のこと。○○丸や○○曲輪と呼ばれる場所。

切岸（きりぎし）……曲輪の周りの斜面を人為的に削り傾斜を戻しくして防御を高めたもの。

土壘（どりい）……曲輪の縁辺部に土盛りを築いたもの。柵や土塀の基礎や防御の足場になる。

空堀（からぼり）……尾根筋や斜面からの侵入を妨げ不利な位置に追い込むために掘ったもの。

水平方向に掘ったものを横堀、垂直方向に掘ったものを豊堀と呼ぶ。

堀切（ほりきり）……横堀の内、稜線や尾根筋を断ち切って掘り抜いたものを呼ぶ。

畝状空堀群（うねじょうからぼりぐん）……斜面に豊堀を連続して配置し、破壊したもの。

△城郭の出入り口を防御するための施設。←どれだけ周囲を防御しても出入り口は弱点になる。

虎口（こぐち）……曲輪の縁辺部に手を加えて明確な開口部を造ったものを指す。

本来は門を構えればどこでも出入り口になるが、虎口は土木構築物により門の配置を固定化し

たもの。

平入り虎口（ひらいりこぐち）……まっすぐ出入りする一般的な虎口

食い違い虎口（くいちがいこぐち）……片方の土塁・石塁を前に張り出すことで一度當ててから一折れして入る虎口

枠形虎口（ますがたこぐち）……出入り口の前後方に土塁や石塁や横堀を張り出して通路の折れをつくり、枠状の空間を備えた虎口

※織田・豊臣氏系勢力の城郭の出入り口に採用された。出撃と防御を一体化させた高度なプラン。

馬出し（うまだし）……出入り口の前に土塁や横堀を伸ばして前衛空間（足場）を作り、開口部を防護する工夫を施した虎口

※織田・豊臣氏系勢力、武田氏・後北条氏の城郭の出入り口に採用された。

◆城館史科学

遺跡そのものの解釈から城郭遺構を当該期社会を読み解く史料として活用することを目指す史料学のひとつ。文献史料や絵図類等の調査により築城主体や当該期社会の様相について状況証拠を固めた上で、縄張り研究の手法から城郭跡を直接読み込み解釈することで得られた見解を以て結論づける姿勢を基本とする。

◆縄張り研究

城郭跡の縄張り構造（曲輪・空堀・土塁・石垣等の土木物や建築物で構成される城郭のかたち）に着目し、城郭跡そのものの形状を把握する縄張り調査を行う城郭研究。現存する城郭跡を最終段階の様相を伝える資料として認識し、地表面観察から遺構平面図（縄張り図）を作成する。城郭跡を縄張りとの関係で有機的に捉え、城郭跡の資料操作を通して歴史研究の「史料」として活用することを特徴とする。1979年に村田修三が提唱し広く認知されるようになった。

縄張りとは、城郭の平面配置を指す用語。城郭跡に残る曲輪や空堀、土塁などによる城郭の配置・施設の構成を指す。城郭跡に残る縄張りを平面図にしたもの縄張り図と呼ぶ。現在残る状態をケバ図表記で図化。

【2】城郭跡の整備・保存の歴史と城郭研究

2-1. 城郭跡の整備と保存の歴史……城郭跡は過去の産物から次第に地域のモニュメントとして保存の対象と認識されるようになった。

江戸時代生まれが生き残っていた20世紀前半では、江戸時代はつい最近のこと。

→明治期までは城郭建造物は良質な転用材として、城郭の石垣は良質な転用石として払い下げ請願や石材の持ち去りなどがみられた。それらの監視などがうたわれた保存会があった。

大正期以降、城郭跡の保存・整備は、その地域の歴史・文化の根本を理解するものとして認識された。そして、顕彰活動の一環として何度も「城郭ブーム」が起きた。そのため、文化財以前に地域振興や観光名所としての認識が先行し、多くは城址公園として整備された。

今日、一般市民の間では、16世紀後半～17世紀前半に築かれた戦国・近世城郭の关心は根強い。

→城郭跡は「近い昔＝レトロ」のシンボル。古城址は歴史物語・戦記のモニュメントとして何度も顕彰された。その一方で、研究対象としては長らく認識されてこなかった。

2-2. 城郭跡の顕彰・整備……近世城郭では建造物（天守・櫓・御殿）と石垣に関心が集まった。

→戦前は天守・櫓・御殿は幾つかは遺されていた。多くは戦災で失われた。

1919年（大正8年）：史蹟名勝天然紀念物保存法の制定。

明治後半から歴史的遺産として保存の機運が起こる……過去のものとなったことで保存の対象に。

解体されずに放置されてきた現存天守などが修理……保存の対象は天守や御殿。石垣など

例）姫路城（1910）松本城（1903-13）備中松山城（昭和初期）

☆第1期復元天守ブーム。 1931（昭和6）年 大阪城天守閣 ※天守閣の呼び名のルーツ。

1928（昭和3）年、洲本城、1933年郡上八幡城、1933年 伊賀上野城など

これらのブームに触発されて都市博覧会などでハリボテの天守模型が建てられた。

☆第二次世界大戦の都市爆撃により焼失

水戸城、名古屋城（天守・御殿）、大垣城、大坂城（紀州御殿）、和歌山城、岡山城、福山城、広島城など

☆1960-70年代、第2期復元天守ブーム→戦後復興の象徴として天守再建が認識される。

……かつての天守を復元した復興天守だけでなく、元々天守のなかった場所に新造する模擬天守まで多数築かれた。

岸和田城・富山城（1954）広島城・浜松城・和歌山城（1958）、名古屋城・岡崎城・大垣城・小倉城（1959）、小田原城・熊本城（1960）、松前城（1961）、岩国城・平戸城（1962）、島原城・中津城（1964）、会津若松城（1965）、福山城・岡山城・唐津城（1966）など

→主として、市や商工会、観光団体などがスポンサー＆事業主体。城郭跡探訪など愛好家が増加。

建物の内部は郷土資料館や観光施設となった（大阪城天守閣がモデル）

↓

この時期の復元事業を支えたのは、主に建築史研究者（藤岡通夫ら）が復元設計を請負い積極的に進めた。

建築史家が建築設計の延長に「復元案」を考証→実際は、現存天守などをモチーフに絵図・指図などから設計。これを補強するように、文献史学、地域史研究者などが城郭に関する歴史的な出来事や城主に関する事項を整理。

→今日のような綿密な考証が求められていなかったので、あちこちの城郭跡で現存遺構を一部損壊して復元建物が建設された……文化財として認識されていないが故の悲劇。

→一方で、戦後歴史学では、城郭跡は「過去の遺産、封建制の回顧」として受け止められていた。

一般市民・地域史研究者の熱狂とは対称的に、アカデミズムの研究者の間では城郭史には関心が集まらなかった。

2-3. 復元天守ブームの明と暗

◆城郭=「白亜の天守閣と石垣」的な近世城郭のイメージが固定化。

観光と地域振興の起爆剤としての築城

・現存遺構の改変　例）岩国城（櫓の位置に天守を建設）、唐津城（天守のなかった台に建設）

・中世の城郭跡にも白亜の天守閣と石垣を整備。

→地方自治体の地域振興事業で多々見られた行政による史跡破壊、それを請け負った建築史研究者たち。

☆70年代以降、近世城下町を対象として、文献史学・建築史・歴史地理学の研究が進展する。

※城郭研究では近世城郭の関心が最初に高まったものの、研究対象は天守や櫓などの建造物と石垣、城下町（武家屋敷・町家）に偏り、肝心の城郭跡そのものは研究対象として省みられなかった。当時盛んだった町並み整備事業などを通じて、文献史学・建築史学・歴史地理学の研究者により進められた。

建築史……天守や櫓、御殿

文献史学……城主や藩主、運営体制

歴史地理学……城下の平面プランからの都市研究

→その結果、1980年代以降に纏張り研究ベースで飛躍的に進展した戦国・織豊期の城郭研究に対して、近世城郭の研究は建物偏重かつ文献史学の成果を以て解釈する状況が続いている。

2-4. 文化財行政の広がりと城郭跡整備

☆文化財保護法……1950年制定。法隆寺金堂壁画の焼損が契機。

文化財として指定・選択・選定・認定あるいは登録を行うことで、文化財保護のために経費の一部を公費で負担することができるとした点が画期的。

→当初は先史・古代に関心が集まり中世以降は重視されてこなかった

1970年代後半から、中世・戦国期まで文化財保護の視点が拡張してきた。

・列島改造計画など周辺部の都市化や急激な開発により、多くの遺跡が開発行為に引っかかることに。

・地方も大規模な圃場整備事業や道路開発により広範囲の発掘調査が行われた。

・文化財対策のために地方自治体に「埋蔵文化財担当職員」が配置され、文化財行政が急速に広がる。

・莊園故地遺跡や城下町遺跡、城郭跡の発掘調査が増え、考古学・文献史学の関心が高まる。

※草戸千軒遺跡、一乘谷朝倉氏遺跡、一ノ谷中世遺跡群

※莊園故地の研究……大山荘、大田荘、田染荘など

次第に城館の保存運動も進むようになった→小山城、山科本願寺、湯築城

☆1979（昭和54）年 中世城館詳細分布調査事業（国庫補助）の開始

→中世城館跡が本格的に文化財行政の対象となる嚆矢。

※1979年は城郭研究のターニングポイント。これ以降、中世城館跡も国史跡に指定される。現在約130余り、但し文献史料の伴う事例が多数。

☆1983（昭和58）年 中世城館遺跡の保存に関する検討委員会の設置

☆1990年代後半から城郭跡の保存・整備が、首長部局による地域振興・公園整備・観光開発型事業から史跡保存を行う教育委員会部局の文化財行政の指導下に推移する。このため、安易な開発・復元事業は抑制された。

・事前の発掘調査により整備が進められる。

例) 安土城、肥前名護屋城、金沢城、岡山城、仙台城、大須賀城、佐敷城など

・天守復元も文献史料・絵図・発掘調査による考証が求められるようになった。

例) 白河小峰城、掛川城、大洲城、篠山城御殿、彦根城御殿、熊本城本丸御殿など

しかしながら、城郭跡が注目されるに連れて、現況保全型整備から次第に史跡の復元整備・建造物復元などの公共事業型へシフトする。これにより、本来遺跡の保存を目的とする文化財行政サイドが、整備・復元事業を通して地域振興・観光開発型事業と親和性を深める方向に進む。

→文化財行政サイドから首長部局の地域振興・観光事業の展開に参画するという現象が生まれる。

2-5. 史跡整備から歴史まちづくり法へ

☆歴史まちづくり法の制定（2009年）【図2】

・文部科学省（文化庁）・国土交通省・農林水産省共同による法案。

かつての事業開発側と保存側の部署が協働することを念頭に置いた法律。

→歴史的お墨付きを得たい事業省側と、首長部局とのコネクションを持ちたい文化庁側の共同歩調。

※町並み整備、都市計画、農業基盤整備、景観保全と文化財保全が同じ土俵で認知された象徴。

文化財単体の整備から、地域社会や都市の全体像を見据えながら面的に整備する意識が求められる。

・文化財行政は、これまでの事業課の開発行為にブレーキをかける役回りから、協働する役回りが求められる。まちやむらの未来像にも深く関わることから、イニシアティブを探れる可能性と同時に、きちんとした分析視点を持たないと自らが歴史的事象の破壊者になり兼ねない危険と隣り合わせ。

・歴史まちづくり法では、史跡の中でも城郭跡の位置づけはかなり高い（城館跡・寺社・民家・土木遺産など）→そもそも、城郭跡はまちの中心核、地域のセンター的役割を果たしてきた。城郭跡や町並みプランを歴史資料として読み込む視点がないと、地域像の解釈を誤る可能性が高い。

※それ故に、城郭跡をはじめとする遺跡を地域史料として捉えを史料そのものから歴史像を読み解く方法論を体得する必要がある。

以上の点を踏まえた上で、「城館史料学概論」では、城郭研究の視点からの城郭跡の保存・整備を行う上で不可欠な先行論文を取り上げ、そのキーワードから検討することとしたい。

【3】参考文献①「中世城郭の立地とかたち」[千田嘉博2007]

～城郭跡の保存・整備と城郭研究について～

千田嘉博が2007年に『遺跡学研究』に掲載した論文。中世城郭を中心に、史跡整備の現状と問題点を示した上で、城郭跡の分析する研究視角を導入することが必要なことを論じています。中世総合資料学に立脚した城郭研究を主張される氏の論から、城郭跡の保存・整備について縦張り（城郭跡の平面構成）の視点が欠かせないことを確認します。

3-1. 城郭のイメージ

「……中世城郭が考古学の調査・研究分野として広く認知されるようになったのは、1970年以降だから、研究史はまだ30年ほどしかないことになる。……」

→考古学の調査・研究分野として中世城郭跡が認知されたのは1970年代以降。

そもそも歴史考古学の研究が広がったのは1960年代。※齋藤忠『中世の考古学』1982年

中世考古学……佛教考古学（寺院・石塔）、窯跡と陶磁器分野の調査研究などが中心。中世の城郭や城下が対象となるのはしばらくしてから。

※文字のない時代をするのが考古学という意識の強さ⇒ 文献史学との棲み分け意識

「……一般に城郭といえば、近世城郭をイメージするのがふつうである。さらに具体的に言えば「天守」や「櫓」、

「柳門」といった建造物こそが城であると、多くの市民は考へているのではないだろうか……」

→城郭のイメージ=近世城郭といえば、建造物（天守、櫓、城門）と石垣。

↓

このため、全国各地の近世城郭に模擬天守が建ち、中世城郭跡でも犬山城天守似の模擬天守や礎石建ち・瓦葺き・白漆喰塗込めの天守型展望台が林立した。一方、建造物へアプローチする道路が付けられ、城郭の平面構成（縦張り）、虎口は破壊された。

→一般市民に誤った印象を与える。例）清須城（清須市）、岩崎城（日進市）、周匝茶臼山城（赤磐市）

「……岩崎城と清須城の事例を振り返ってみると、いずれもよかれと思って「整備」したと信じたいが、どちらも城跡を壊滅させ、また大きな誤解を招く結果となっているといわなくてはならない。そして城跡整備における建物至上主義が、それだけではよい結果を招かないこともわかる。……先にあげたふたつの城跡からは、建物だけではなく城としての平面後世の組み立てを正しく認識し、整備することも重要なことが明らかである。」

↓

堀や土塁による区画をどう把握して評価するかは、曲輪の連絡、連結状況から歴史を読み解いていく、城郭跡の史料性に直接関わる問題となる。

3.2. 曲輪配置と権力 = 縦張りから分析する視点の有効性

「……城主の権力と家臣たちの権力が拮抗し、おたがいに規制しあうような戦国期の大名権力によく見られた権力構造が築いた本拠の城は、並立的で横並びの曲輪連結となり、大名を頂点とした官僚機構が整備されていくと、その権力の本拠の城は、階層的で求心的なプランをもつことが判明した……」

→曲輪配置に明確な法則性

◦ 近世城郭 = 階層的、求心的な曲輪配置でつくられた。

大名を頂点とした官僚機構の整備などが背景。

◦ 戦国期城郭 = 並立的・横並び的。

城主と家臣の権力が拮抗し、おたがいに規制しあうような権力構造が背景。

「……城郭を構成した曲輪群がどのように連結されていたかは、その城をつくった築城主体の権力構造と表裏の関係にあり、城跡の構造分析をすることで遺跡から築城主体の特質に迫ることが出来る……」

→これにより、文献史料の少ない地域、織豊期に没落した大名についての検討が可能。

例）安土城（織田氏）

安土城などは天守や石垣だけに先進性をみるのではなく、曲輪の求心性、階層性をいち早く実現したことによる意義があることを提示。

普請（土木工事）と作事（建造物工事）は正しく把握する必要がある。

↓

「……だからこそ城郭プランの資料性をしっかりと踏まえた整備を実現することが重要である……」

3.3. 戦国期拠点城郭

☆從来の戦国期山城の理解

平地の館が武士にとって一貫した政治と生活の拠点、という認識 例）一乗谷朝倉氏館跡

山城は臨時の砦的役割を越えるものではなく、軍事面を肥大化させた傍流という評価

↓

☆「根古屋式」の城郭運用 ……村田修三が提唱。

→日頃は平地の館、軍事的な危機が訪れるとき背後の山城に立て籠る、館と山城の使い分け。

↓

☆戦国期拠点城郭 ……千田嘉博が提唱。

「……戦国後期には館（生活・政治）と山城（軍事）の使い分けではなく、生活・政治・軍事・経済といった諸機能を統合した新たな山城、戦国期拠点城郭が出現したことによる大きな特色が認められる。……」

例）七尾城（畠山氏→前田氏）、岐阜城（織田氏）観音寺城（六角氏）、芥川山城（三好氏）、

龍王山城（十市氏）、石見七尾城（益田氏）

3.4. 戦国期城郭と整備

「……城郭をもった歴史的意味を総合的に把握していく基礎として、城郭の平面構成（いわゆるグランドプラン、網張り）をつかむことが重要である。……」

→センターによる測量図があるが、正確な把握は困難。

その代わりに、民間学の手法として発達した城郭の地表面観察の方法（網張り調査）がある。

「……発掘調査にせよ、整備にせよ、担当者はまずはしっかり対象となる城跡を歩いて観察し、城の構造や現状をつかんでほしいと思う。……城郭研究ではとりわけ全体像をつかむこと、曲輪（防御した削平地）の連結状況を分析することの意味が大きいから、おのずから地表面観察の成果をどう吟味するか、ということの意義も大きい」

↓

※但し、網張り調査を軽視したまま進められた整備は数多くみられる。

例）八王子城「御主殿」、山中城「西櫓」、安土城伝織田信忠邸跡など枚挙に暇がない。

【4】参考文献②「中世城郭の研究」[千田嘉博2003]

～史料学としての城郭研究～

千田嘉博氏が「中世総合資料学の提唱」（前川要編）に掲載した論文。中世総合資料学に立脚した城郭研究を主張する千田氏の論を読むことで、中世城郭の研究から「城館史料学」につながる史料学としての城郭研究のあり方を知る手掛かりとなります。

4.1. 城や館を明らかにすること。

「……もともと城や館が多様な機能をもち、中世社会を成立させたセンターとして重要な役割を果たしたことが、城郭の調査・研究に（中世考古学の中で）大きな期待が寄せられる本質的な理由である。たとえば最終的には近世城下町に帰結した城下都市の発達を正しく理解するには、都市核であった城や館の把握を欠くことができない。……」

→今日の日本列島にみられる都市や村落の基本的な構造は、16世紀末の戦国・織豊期から17世紀の近世初頭に成立したと考えられる。当該時期に活発に行われた城郭および城下の普請・建設が地域の歴史に大きな影響を与えた。それ故に、城郭はこの根幹となる時代を読み解く大切な手がかりとなる。

4.2. なぜ、城跡から中世の歴史を考えるのか。

歴史学研究……「今日に伝えられた膨大な文字史料や絵図資料をもとに研究を進め、叙述する」

※確かに文字史料は「文字として書いている」だけに雄弁である。

その一方で、「史料そのものが武士や寺院など領主側に偏りがちであり、地理的にも中央に偏在するという問題」がある。文字に記されていることが実際にあったこととイコールとは必ずしも言えない面がある。

→逆に、遺構として遺されたものは文字では記されていないが、同時代の様相をダイレクトに今日に伝えているという性格を有する。特に城郭遺構は遺された数も多くまとまった形で同時代の様相に迫る可能性を持つ。

↓

「城郭跡の実態を知るには、実は遺跡としての城郭跡を調査・研究する以外に迫る方法はない。」

→城郭跡、及び周辺の調査を面的に行うことで、地域の政治的・社会的構造の変化を読み取り分析する。

「……中世城郭を調査・研究することは、文字史料をもとに検討され、描き出されてきた地域の歴史の叙述を、遺跡と言うまなく別の資料を用いて、新たな視点から一層豊かに描いていくことなのである。……」

→文字史料や遺物からの歴史学、考古学研究において、城郭跡の調査はまだまだ未開拓の分野。

・歴史学と考古学の双方の手法を複合して用いることで解明する点、双方の利点を活用する研究分野。

・城郭施設が、当時のさまざまな社会活動の受け皿として機能した点は、他の資料よりもはるかに有益な情報を得る可能性を持つ。

「……遺跡から中世を考えていくときに大きな課題になるのは、いかに政治や社会の構造に独自の分析から迫り、解明していくのかということである。……精緻な以降の変遷を把握することや、遺物の特徴や変遷を計量的につかむことなど、考古学独自の分析方法を深めることがますます重要である。そして地表面観察の成果や、地籍図（明治的地租改正に伴ってつくった土地台帳の付図）、航空写真を用いて発掘調査した調査区以外の歴史情報を、いかに統合して分析を深めるか、ということが大切（となる。）……」

4-3. 調査の方法

「中世城郭の考古学的研究は発掘だけでなく、地表面から観察するという古典的な方法で概要をつかむことができる。…」

→城郭跡の内、丘の上や山の上に築いた城郭跡は、もともと大きな土木工事を伴ったこともあるが完全に埋没していないことが多い。よって、地表面から遺構の概要がわかるという利点 = 縄張り調査の有効性。

↓

1970年代以前から、城郭跡の平面構造を簡易な測量をしながら図面にまとめる縄張り調査が民間学として在野の研究者の間で実施されてきた。今後は、教委・埋文センターの専門職員の発掘調査と、民間学の縄張り調査の成果が一貫した視点で行う研究者の育成が課題。

↓

「豊かな資料群とともに、独自に地域の歴史像を提示しようとする新しい段階に入ったといえる。……考古学や文献史学などのいずれを基盤としても、城や城下のプランを明らかにするのはもはや当然のことであり、そこから何を読みとて、何を解明するかが問われる所以である。……中世のさまざまな資料を総合して検討を進める「中世総合資料学」に立脚した中世城郭研究がはっきりと胎動している。」

4-4. 研究の歩み

第一期……1970年代まで

戦後の民間学による城郭研究の再出発と、その成果の結実としての『日本城郭全集』『日本城郭体系』の刊行。

第二期……1980～90年代

1979年の村田修三による日本史研究会の大会報告「城跡調査と戦国史研究」によって、民間学と歴史研究との統合が果たされたことが、その後の研究を方向づける大きな転換点となる。

→「全国城郭研究者セミナー」の開催による論点の深化と民間研究の組織化。

中世城郭の発掘例が増加し、発掘調査と縄張り研究の協働が模索された時期でもあった。

第三期……2000年以降

歴史研究としての城郭研究がしっかりと認知されるとともに、第二期で議論されたさまざまな成果が歴史叙述として姿を現しつつある段階。

※今回の講義で取り扱う「城館史料学」は千田の述べる第三期に相当すると考えられる。

【5】城館史料学からみた再検証の有効性。

従来の中・近世史研究を牽引してきた文献史学・歴史考古学では、論を構築する上で年代比定の材料に城郭跡の廃城時期などをあてはめて用いることが多い。

↓

しかしながら、城郭跡の遺構解釈を行わずに、文献史料などに記された城郭跡の廃城時期を鵜呑みにして年代比例の根拠として解釈しているものが多い。さらにそうして得られた裏付けの弱い年代比定を根拠にして陶磁器などの遺物編年モデルが設定されている。そしてその遺物編年モデルを用いて別の城郭跡の年代比定をするといった循環がみられる。→実際の遺構解釈から乖離し齟齬をきたす、といった構造的問題を持つ。

それ故、史料学としての城郭研究の側から、遺物の年代比定の根拠となっている城郭跡について縄張り分析による再解釈を進めることで、年代比定の見直しと既存の編年モデルの見直しを喚起することができる。これにより、それらの年代観に依拠してきた諸分野の既存の成果に対して大きな修正を提起することが近年起きつつある。

例) 肥前岸嶽城【図3】

従来は天正末年の豊臣秀吉による波多氏改易で廃城。

→これに依拠して古唐津遺物編年の第Ⅰ期の年代を1580年代として他の遺跡の年代判定に使用。

しかし、縄張りから、岸嶽城は1600年以降に寺沢氏が居城として大改修を受けていたことが判明。(木島孝之「唐津焼創始時期—1580年代—」を問う—岸嶽城の縄張り構造の解明を通して—)

↓

閑ヶ原以前の年代判定に使用されていた古唐津編年の第Ⅰ期が、実は閑ヶ原以後となり10年下がること

となった。……他の遺跡評価に大きな影響を与える。

例) 武藏杉山城【図4】

後北条氏系縄張り技術を駆使した杉山城跡にて行われた発掘調査で瀬戸大窯陶器が一部出土。

これをもとに、従来の16世紀後半とする城郭研究の年代観に対して、瀬戸美濃編年の大窯第1段階・第2段階を用いて15世紀末から16世紀前半の年代観を与えた。

ところが、実際の瀬戸美濃編年の年代比定の根拠を見ると……

大窯第1段階……1476（文明8）年に廃城となる勝間田城の出土遺物では大窯直前の遺物が確認される。

1498（明応7）年に大地震で廃絶したとされる安濃津遺跡に確認される。

おおよそ1520年代まで。

大窯第2段階……1532（天文元年）廃絶の山科本願寺や、天文四年廃絶の枝広館推定値から出土事例がない
→1530年代以降に登場、1550年代頃までと想定される。沓掛城・品野城など

とあり、勝間田城や沓掛城などの年代比定が遺構解釈の伴わない文献史料の援用となっている。

これを裏付けるように、1581年に武田勝頼が築いた新府城や1590年の小田原攻めまで機能した津久井城から第1段階・第2段階の遺物が出土する。

→逆に、城郭跡の年代観から瀬戸美濃の大窯製品の年代観は破綻していることが明らかになりつつある。

例) 一乗谷朝倉氏遺跡

中世考古学を代表する遺跡であるが、上城戸・下城戸の虎口プランから織田系勢力の関与が指摘されていた。
そこで、朝倉氏屋敷跡周辺を居館跡だけでなく縄張り構造から検証。

朝倉氏屋敷跡及び周辺図【図5】



- ・丘を背にした伝湯殿屋敷跡を主郭として、北西側に土塁を伸ばし櫓台を構える。伝朝倉氏屋敷跡は主郭から伸びる土塁と隅櫓で囲まれた第二郭となる。北にやや食違い状になった虎口を持つ。
- ・空堀を挟んで伝朝倉氏屋敷跡の南側にも土塁痕跡の残る曲輪がある。隅櫓の痕跡があり屋敷跡前の横堀に横矢を効かせる位置にある。
- ・伝湯殿屋敷跡の南側は空堀を挟んで対岸に中の御殿が第二郭となる。背後に空堀で土塁を構築し南側に屈曲しながら伸ばし虎口を持つ。その下に第三郭を構える。

以上の特徴を踏まえると、一乗谷は朝倉氏滅亡後の天正元年後半に織田方勢力により館城として改修された可能性が考えられる。館跡の縄張り分析から、上城戸や下城戸の石塁ラインと枠形虎口が一乗谷の外郭ラインとして一体的に解釈できる。

→朝倉氏屋敷跡は、縄張りの視点から織田氏の改修を受けた「一乗谷城」である可能性。

この縄張り解釈が妥当だとすると、ここを天正元年の朝倉氏滅亡を下限としていた年代比定が、すべて天正3年の織田氏の越前再征まで下ることとなる。

このことは、朝倉氏で解釈していた御殿跡の解釈や殿舎の評価、周辺の城下の評価、それに伴う遺物や遺跡の解釈に大幅な修正がもたらされる可能性を有する。



従来、一乗谷朝倉氏遺跡が「戦国城下町」として町の部分に意識が集まり、初期に発掘された館跡について文献史料の成果などから朝倉氏館としての解釈が先行してきた。それ故、縄張り調査を通して、史料としての城郭研究の側からの再検証の余地がある。

※以上の例をみても、城郭跡が都市や地域のコアとなる施設であるため、城郭跡の遺構解釈の見直しが周囲の歴史像や遺跡の評価を大きく変化させることになる。文献史学・考古学・歴史地理学の研究において、城郭跡を史料として用いる手法と視点をしっかり学ぶことが、研究者としてメリットとなることを知ってほしい。

第2講 繩張り研究から城館史料学へ ～城郭跡を史料として捉える歴史研究の展開～

第2講では、

城郭史と城館史料学は何が違うのか？歴史学や考古学との関係は？

城郭史研究から縩張り研究、城館史料学へどのような試行錯誤をしてきたか。

について、千田嘉博氏の「中世城館研究の構想」を手掛かりに学びたいと思います。

【1】参考文献③「中世城館研究の構想」[千田嘉博1995]

千田嘉博氏が「中世城郭論集」に掲載した論文。後に著書「織豊系城郭の形成」収録。

戦前から90年代初頭までの城郭研究の研究史整理を行うと共に、「新しい段階の中世城館研究」を構想し、城館研究の方法論と枠組みを示した論文。

「城郭＝建造物、石垣」といった城郭のイメージに依拠した既存の城郭史に対して、

縩張り調査を基本とする城郭研究（縩張り研究－城館史料学）が市民権を得たのは案外新しい。

「……いわば学会とは無縁に形成されてきた、知の系譜・城館研究は、外部からの働きかけによって、近年、大きく変貌した。文献史学と考古学の波である。……」

→1980年代初頭に、民間学の城郭研究から縩張り研究（縩張り調査による城郭研究）が学術研究として導入。その背景には、70年代に文献史学や歴史考古学でフィールドワークや中世遺跡群への関心の高まり。

「……文献史学は、六〇年代頃から庄園調査などを先駆けとして、現地調査の成果を実感を高めるだけでなく、それ自身を史料として使うようになってきた。……歴史考古学は（中略）急激な都市部の開発を後押しに、中世さらには近世のあらゆる遺跡を対象とした中世・近世考古学の分野を成立させてきた。城館研究にも、こうした波が押し寄せた……」



。文献史学……莊園故地調査など現地調査の成果を史料として用いるようになった。

。歴史考古学……陶磁器などの生産遺跡や寺院遺跡中心から、一乗谷朝倉氏遺跡の保存や草戸千軒遺跡の発掘調査などを契機に中・近世考古学として急速に進展した。

※當時爆発的に広がった都市部の開発に伴い発掘調査が増加するに連れて、文化財行政が市民権を得て急速に環境が整備された。

千田氏は、それぞれの波が到達し、大きなうねりとなったのは、80年代の初頭として、80年代以降で大きく二分される、と整理する。

1-1. 七〇年代までの縩張り研究……在野の愛好家を中心とした城郭史研究の時代

1) 大類伸・鳥羽正雄『日本城郭史』1936年

城郭遺跡を重視し、遺跡群の中で城館を評価すべきことなどを提起。戦前の城郭研究の最高峰。

「城郭史研究の資料としては先ず現存する城郭、城址を擧ぐべきはいふまでもない。（中略）城址として今日残存してゐるもの、大部分はその壘と堀だけが残つてゐるもので、建築物の完備したものなどは殆どない。中にはたゞ山地丘陵に削平地のみが認められる様なものさへ甚だ多い。しかし此等も研究上それ相当の意義を有する捨て難い資料である。此等は考古学的研究法によつて研究せらるべきであり、更に又城址と共に附近の河川・沼沢・掘削・山岳丘陵に於ける削平地・道路・神社・寺院・村落・都邑・港湾及び発掘等までも参考として大いに注意を払わなければならない」と適確に指摘している。

→先見的な視点が示されたものの、具体的な調査方法は未だ確立しておらず、遺跡の評価など考古学的研究法は未だ展開されないまま戦争を迎えた。

2) 草莽の志士たち

中世の城郭跡が「深い謎と伝説の霧」に覆われていた時代。

在野の研究者が城郭跡に関心を持っていたが、未だ「城郭跡」の古跡を紹介する段階。

遺跡そのものがどのような形を持つのかなどの関心はなかった時代。

- ・近世城郭跡を中心に復元天守ラッシュと城郭ブームが起こった。

戦災で失われた城跡を再建することが都市復興のシンボルとなった。

同時に城郭のあった時代への憧憬と、都市のモニュメントとして期待された。

1958年：広島城、浜松城、和歌山城

1959年：名古屋城、岡崎城、大垣城、小倉城

1960年：小田原城、熊本城

1961年：松前城

1962年：岩国城、平戸城

1964年：島原城、中津城

1965年：会津若松城

1966年：福山城、岡山城、唐津城

わずか9年余りで18もの天守閣が復元・創設された。「城」=天守イメージの再生産と固定化。

- ・城郭ブームを背景に、同時代には在野の城郭愛好家を中心に城郭研究団体が各地に設立された。

↓

1966-68年 「日本城郭全集」の刊行

全国を網羅した資料集成として刊行されたが、積極的に遺構を読み取り歴史を明らかにしようとする姿勢はみられなかった。→「深い謎と伝説の霧」に覆われていた時代。

3) 草莽の志士たちが担った縄張り研究の胎動期

小室栄一「中世城郭の研究」1965年

「城郭の諸形式は、それらを生み出した各時期の歴史的特質や領主権の性格などと有機的関係を持つ筈であり……そのような問題意識を持つ城郭研究の基礎的な仕事は、なによりも、先ず、城址遺構のグランドプランの実測に基づく性格な把握と、その復元でなければならないだろう」

→城館研究に遺構把握が不可欠であり、縄張り図・測量図作成がその手段としていかに有効であることを指摘した。但し、具体的な方法論や分析視角の深化には繋がらなかった。

山崎一「群馬県古城址の研究」1972、79年

ケバ書きによる縄張り図で調査図【図6】を作成し、群馬県地域を中心に面的な調査集積を行った。

→堀、土星・曲輪の組合せといった地表面観察で現地の城跡から読み取れる縄張り情報、ケバ書き縄張り図が如何に的確に示せるかの実践を行った。

「山崎氏の活動は、縄張り図を描くという調査が個人で可能であり、そうした調査を積み重ねることがどれほど重要か、その実行によって示したのである。」

※山崎一のケバ書き縄張り図の表記法は、その後の縄張り図の表記法として広く採用された。

1-2. 八〇年代の城郭研究

城郭研究の新しい潮流は1979年にはじまるといってよい。

1) 「日本城郭大系」の刊行開始、1979年

各地の研究成果が集められた資料集成として刊行された。

「『日本城郭体系』では地表面観察による遺構把握が進展し、縄張り図が増加したことが大きな特徴である。

それでもうひとつの隠れた成果が、この刊行を契機に各地の主要な城郭研究者が、同じ意識に立ったことである。」

→在野の研究者で試行錯誤されてきた縄張り図の表記法が共通のフォーマットとして次第に共有された。

→編纂作業を通して、各地の研究者のネットワークが形成される。

2) 村田修三「城跡調査と戦国史研究」1979年

日本史研究会大会報告にて、「中世の城郭遺跡を地域史と在地構造分析の史料として活用する」と提唱。

そして山城について「縄張、つまり郭（人口で防禦された平場）の配置を主とするグランドプランの

把握が調査の最重要部分をなす」と縄張り把握が調査の中心となることを強調した。

↑文献史学においてフィールドワークへの関心と新たな資料論を模索する動きが背景にあった。

「さらにはこの年を城郭研究史上、重要な年として永く記憶させるのが、村田修三氏の『城跡調査と戦国史研究』の発表である。村田氏は『日本城郭史』以来、くり返し重要性が述べられながら足踏みをしていた、城館遺構から中世の社会を見る具体的方法と成果を、はじめて提示した。……この発表によって、城郭研究者の活動が、懐古趣味や、城郭そのものの解明に留まらず、作成した縄張り図を歴史学の資料としていく道筋が発見されたのである。城館研究ははじめて歴史を解明していく手段として、認識されることになった。」

→作成した縄張り図を歴史学の史料としていく道筋を開いたターニングポイント。

3) 全国城郭研究者セミナーの開始（1984年～）

中世城郭研究会が主体となり、城郭談話会が協力する枠組み。

城郭研究のトピックを取り上げ、全体で討論する場が創出された。

→ケバ書き縄張り図という共通フォーマットができたことで、研究者同士で調査成果が共有され、共通の土俵で討論を闘わせることできるようになった。その結果、方法論が整備されるとともに、各地の活発な事例報告が行われ、学際的シンポジウム（討論会）への参画など急速に城郭研究は広がりを見せた。

1-3. 跳動する城館研究

1) 城館資料集の刊行と進展

- 「図説中世城郭事典」（1987年）の刊行……全国を網羅したはじめての縄張り基本資料図集。
- 中世城館跡詳細分布調査事業（国庫補助）の開始
調査図を掲載し、都道府県単位で城郭遺跡の分布が把握された。次第に縄張り図が採用され、共通のフォーマットで全国の事例が網羅的に把握されるようになった。
※愛知県が縄張り図や地籍図による調査を加えて体系だった調査を行い、調査法が整備された。
この外、広島県、岐阜県、島根県、大分県などで城郭研究者が多く参加した。
- 機関誌の刊行……「中世城郭研究」「千葉城郭研究」「愛城研報告」「織豊城郭」をはじめする各地の城郭研究団体機関誌に多くの論文が寄せられた。

縄張り研究ベースの城館研究の研究視点は早い段階から村田が精力的に提起してきた。

「城の発達」「城の分布」【村田修三1987】⇒「図説中世城郭事典」所収。形式論・分布論から中世城郭を論じる。

↓

さまざまな社会情勢の受け皿となった城郭跡について、研究視角は多様な広がりを見せた。

「中世城郭研究論集」【村田修三1990】「新視点中世城郭研究論集」【村田修三2002】など。

2) 城館を中心に据えた多様な視座が培われる。千田嘉博は以下の6つの視点を紹介する。

①遺構（縄張り）編年→遺構の年代比定と考察の基礎となる縄張り編年の研究。

縄張り情報を史料化する基礎作業として位置づけられる。形式論と分布論の観点から分析が試みられた。城館の防禦遺構に注目し、その変化を考古学の形式学によって分類する。そして、文献史料や発掘成果をもとに年代を決定し、遺構編年を組み立てる。

↓

その中で、大きな成果を提出したのが千田嘉博「織豊系城郭の虎口変遷モデル」と、木島孝之「織豊系城郭における虎口プラン変遷案」である。

②地域構造と城館分布→城郭を領域内の群として把握する研究。

城郭跡の地域的な分布から地域史研究の深化を計る。

多田暢久：大和国東山内地域、播磨国西部を中心に行う。齋藤慎一：東国の境目領域と城館。

③城郭と城下の統一的把握→縄張り調査による遺構把握に加え、発掘成果や地籍図の分析を一体的におこなうことで戦国期城下町などを復元的に考察する。

④山小屋・村の城館→村落と城館をセットで考える研究視点。

地域との関わりから城郭を再評価する視点。文献史学と歴史考古学の側から城郭研究の側に地域史研究

の視点の1つとして提示されたもの。当時、活発な議論がなされた。

⑤地域性→城館の分布論を地域性として捉える研究視点。

村田修三「城の分布」[村田修三編『中世城郭事典』三（新人物往来社、1987年）]

⇒列島全域にわたる調査の成果から、城館の分布論を地域性に高めて論じた。

千田嘉博「戦国期城郭・城下町の地域性」[初出『ヒストリア』129号（大阪歴史学会、2000年）]

⇒城館プランの求心性、館と山城の分離、城下機能の配置、位置などを基準に、列島の戦国期城郭を五つに区分し、地域の特質を説もうとした。

⑥純粹考古学による成果→発掘成果を網張り論の視点を加えて読み込み、考古資料の活用をめざす研究視点。

中井均らにより、織豊期城郭研究会の成果として提出されている。機関誌『織豊城郭』

→各地の城郭跡を担当する文化財行政担当者と城郭研究をつなぐ役割を果たす。

「……このように多様な方法から進められる城館研究の基礎として、欠くことができないのは城館の全体像を把握する、広い意味での網張り研究の視点であると思われる。たとえ部分の詳細な発掘調査がおこなわれても、その調査区の場の意味を、城館全体の中で認識しなければ、適切な評価は不可能である。また、全域を発掘したとしても、曲輪内だけで考えては評価は不十分である。曲輪相互の連動を踏まえた曲輪群の評価を行わなければならない。造構の評価も場の視点を得てはじめて活きてくる。」

この6つの視点を踏まえて、城館の網張り調査を基礎とする城館研究を起点に歴史研究を進める姿勢が求められる。

【2】城郭研究の特質と新しい城館研究

2-1. 城館研究における軍事性

城館研究において「軍事施設としての独自性＝防御性」を念頭に、軍事面の視点を無視するわけにはいかない。「……武士権力は明らかに、その軍事力を背景にした権力であり、まさにそうした権力の性格が、城館構造に反映しているのである。だから城館遺跡の研究においては、城館の軍事面を解明することで、築城主体とそれを規定した社会の在り方を、一定程度、独自に分析することが可能になる。軍事面の特質は一方で、その社会の特質に深く関わることを認識しなければならない……」

→城館のもつ軍事性を的確に把握し、表現できる方法が網張り図の作成である。

「城館の防禦機能を第一に明示することを目的とした図面が網張り図なのである。」

網張り研究は防禦造構を視座に据える。網張り調査の有効性は何度でも再検証できることにある。

2-2. 新しい城館研究をめざして

「網張り研究を中心に、あるいは基礎的な視点とした城館研究には、二つの大きな課題がある……ひとつは、網張り研究自身をより深化させること、もうひとつは網張り研究の成果を広い視野からの成果と合わせて、いかに実り豊かに中世社会を解明していくかである。……」

千田嘉博は村田修三の「中世の城郭遺跡を地域史と在地構造分析の史料として活用する」という網張り研究の提唱をさらに拡張して、中世遺跡群（歴史考古学が対象とする遺跡群全般）を地域史充実の史料として活かしていくことが求められると定義する。その核として城館研究があると位置づける。

☆千田嘉博の示す研究の五つのレベル。

〈1〉曲輪レベルの研究

→一般的な城館を構成する最小単位である個々の曲輪の内部がどのようにつくられていたかを考察する。建物、空地、井戸、屋敷区画、通路、土塁、虎口、柵列など

〈2〉城館構造レベルの研究

→城館全体の有機的な構成を把握する。網張りに着目した分析。

〈3〉城館周辺レベルの研究

→城館をとりまく城下、村落、河川、街道交通、寺社、墓地、市場、田畠など。

城館周辺の状況を把握し城館を核とした周辺地域の社会システムを復元する。

さまざまな城と館のあり方を適切に分析せねばならない。

〈4〉地域レベルの研究

→文献史学、歴史考古学、歴史地理学など多分野からの協働が必要。

城館を核とした中心地と、港町など城館を核とする中心地が、どのような有機的なつながりをもって郡単位や一国単位の中心地網ができあがっていたかを分析する。

〈5〉地域間レベルの研究

→地域社会の構成の特性を中世城館などの遺跡群から比較することで、列島の中世城館のあり方、さらには地域の中世社会のあり方を相対化して把握しようとする研究である。

これらの五つのレベルを設定することで、城館を城館それだけで評価してはいけないことを提起する。

⇒「縦張り研究に加えて、測量や発掘で把握されたことをベースに、城下、村落、生産、河川、街道、交通、寺社といった遺跡群との関わりの中で検討されねばならない。」

※城館史料学会の発足と『城館史料学』の刊行（2003年～）

「本会は、城館の遺構を対象とした研究を深め、歴史学において基礎の一つとなり得る新たな史料学を確立することを目標とする。私たちは、これを明確にするため、この方向に沿う学問的営為を「城館史料学」と総称する。」

↓

城館を地域史と在地構造分析の史料として活用する村田の提唱を発展させ、史料学としての城郭研究への展開を進める動きへ。

第3講 城郭跡の調査・解釈、研究手法について

～城郭跡を理解し読み解くこと～

縦張り調査を基本とした城郭研究（縦張り研究→城館史料学）は、歴史考古学の手法を用いて縦張り図の作成を通して城郭跡の調査と調査成果の史料化を行い、文献史学の成果や解釈を勘案しながら歴史研究を指向します。第3講では、この研究手法について整理すると共に、縦張り研究から得られる中・近世城郭の変遷を確認します。

最初に千田嘉博が示した縦張り調査の方法について確認します。そして村田修三による中・近世城郭の変遷を検討します。

【1】参考文献④「中世城館縦張り調査の意義と方法」[千田嘉博1991]

～縦張り調査の方法～

千田嘉博が『月刊文化財』に掲載した論文。文化財行政の関係者に向けて、縦張り調査とはいかななる調査なのかを提示した上で、城郭跡調査に縦張り研究の方法が有効であることを論じた。この前後から、各都道府県の悉皆調査にて縦張り図が採用されるようになった。

1-1. 縦張り調査の位置

☆縦張り調査—的確に現況の遺構を把握するための調査。

縦張り図は、城郭遺跡を史料化するために作成される防禦遺構の表現に主眼を置いた遺構平面図。

→得られた調査図は縦張りの編年研究などを用いることで、史料化の試みにより歴史研究の史料として活用する道筋が開かれる。

「中世城郭遺跡は広大な面積を有し、地形を最大限利用して築かれている。そしてきわめて複雑なプランをもつことが多い。……だから縦張り調査は、地表面観察可能な中世城館遺跡への、最初のアプローチの方法として、一般的に行われている。」

「中世城館を研究するためには、まず的確に現況の遺構を把握することが大切であることはいうまでもない。……城館研究者は城館のもつ最大の特徴である防禦性、その具現的表現である堀・土塁・虎口・石垣などを主

眼に調査してきた。」

※群馬の中世城郭を精力的に調査した山崎一がケバ書きの縄張り図を多数作成する。

→山崎一から本田昇へ、そして中世城郭研究会や城郭談話会などを通して、縄張り研究者の間でケバ書きの縄張り図の調査法は広く共有された。但し、在野の研究、愛好家によって担われてきたこともあり、調査法や図の表記法、遺構の解釈や史料化の方法などは各自の試行錯誤に任される部分が多くあった。

↓

※実は、どんな精度の高い技術を導入した測量図でも、最終的に遺構と判断するのは調査者である点では縄張り図も測量図も根本的に大きな相違はない。測量により客観的データから現況を突き詰めたとしても、結局は調査者が経験と訓練に基づき「どれが遺構であるか」という判断の元でポールを立てるという調査者の意図からは自由にならない。

→縄張り図で言われた「客観性」というのは、測量する場合にいずれの場合でもつきまとう問題である。

「縄張り調査による調査図面の作成は、……本格的調査に向けた仮説的手段として推進されるべきであろう。」

→その分、何度も再調査できることでより精度を高めることが期待される。

ケバ書きの縄張り図により防御の視点から繊細な遺構を的確に示し全体像を把握した上で、土星の高さや堀の深さ、曲輪の面積や微地形など数量把握に測量調査を行うことがのぞましい。さらに発掘調査を加えて行う。また、測量図に反映された計測データについて、縄張り調査で培った視点で読み取ることで遺構解釈により曲輪内部の傾斜や微地形の読み取りなどの有効なデータが抽出可能である。

1-2. 縄張り調査の方法と図化表現 ……具体的な調査法について一縄張り図の作成。

現地での調査が基本。城館周辺の地形図を1/1000に調整したものをベースにして作業を進める。必要な道具はコンパスとテープ。定規と分度器と筆記用具【図7】

基本は、遺構に対して方角と長さを測定してベクトルを割り出すことで、北を0°にして方眼紙に写すことができる。そして、そのベクトルと遺構の縁辺部との距離を出して図面に記入する。

・調整した地形図を下敷きにケミカルマットやマイラーベース（地籍図に使用するトレーシングペーパー）に作図する方法と、方眼紙に下敷きなしに直接作図する方法がある。

前者は歩測などの簡易測量でも地形図に沿ってズレを回避できるメリットがある。後者の場合はレンザティックコンパスなど一定の精度を持つコンパスとメジャーで測定することで誤差はある程度回避される。オートレベル等測量機材を導入すると、現地で調査した数値を野帳にとって後で清書することも可能。

→精度と時間は反比例するので、調査の目的に応じて適宜検討されたい。

現地にて城館遺構の分布確認を行い、図面にする城域の範囲を把握した上で調査作図に入る。

遺構については、曲輪や土星、空堀などの城郭遺構を見極める作業が第1段階にあり、その上で、第2段階として、遺構の組合せ（虎口・土星・堀・石垣・土橋、畠状空堀群など）といったポイントを重点的に観察する必要がある。こうしたポイントの見極めが城郭遺構の読み込みに大きく影響する。表記法は【図8】の通り。

↓

現地で作図した調査図をトレースして清書する。

1-3. 調査成果の史料化—編年研究の導入—

「こうして作成した縄張り図は、それだけでも城館の構造を明らかにした、重要な史料である。しかしそれをそのまま集成していくだけでは、個別事例の報告と具体例の叙述に終始し、その壁を打ち破ることはできない」個別事例の報告と具体例の叙述に留まってきたのが、従来の城郭研究。

↓

この壁を打ち破るために、城館遺跡の編年研究が有効である。

史料化の方法論について、千田嘉博が行った畿豊系城郭の編年研究の事例からみてみよう。

第1段階……基礎資料の集成。目的に応じて多くの縄張り図を収集する必要がある。

第2段階……縄張り図レベルの検討。

個々の城郭跡にみられる多くの性質の中から、発達の法則性を読み解く作業。

城郭遺構のどの部分が縦年材料に適しているか選択する必要がある。

→最も変化の激しい部分、一貫して変化していく部分がそうした材料に適している。

※織豊系城郭の場合、虎口の折れであったが、案外、そうした部分を見つけ出すのは難しい。

第3段階……モデルの設定。

「縦年に最も有効な部分に着目しつつ、城館全体の変化を視野に入れた模式化を行う。」

不要な情報を取り除き、必要と認めたものを抽出して形式概念を構成する。

単純から複雑へという理解に留まらず、その変化がどういう性格の変化であったかを見極めること。

→織豊系城郭の場合、縦年に有効とみられたのは虎口プランであった。

合理的にそれぞれの虎口を類型化して認識する作業を通して、時系列的な前後関係を推定することが可能に。

第4段階……モデルによる分類の実施。 第3段階で行った模式化をもとに形式組成を検証する。

第5段階……属性分析による分類の追検証。

虎口の形式組列の妥当性を検証するため、同一城郭内での他の防禦遺構との共存関係を調査する。

「城館の部分の変化に着目する研究は、それのみに目を奪われてはならない。つねに部分と城館全体の関係を確認しながら、進めていくべきである。」

第6段階……年代決定。

→文献によって築城および廃城年代が明確なものを柱とする。そして発掘成果も活用する。

これにより縦年は完成する。

※但し、城館遺跡の縦年研究はおおよその傾向を押えることを念頭に置く必要がある。新旧の技術は併存しながら推移するなどの性格を踏まえると、十年単位で推移するような細かな様式縦年は本来あり得ない。あくまでもおおよその技術的な展開の傾向を遺構分析から抽出することが目指すべき方向である。

「城館遺跡を史料化する方法は縦年研究だけではない。分布や地域差、都市や村落との係わり方を追及することなどによって、文献だけでは、あるいは発掘調査だけではわからない、中世社会の解明が可能である。より充実した史料化の道を探り出す努力が必要だろう。」



縄張り調査と縄張り図の作成により多くの事例の収集を行うことと、それらの事例から縦年研究を行いおおよその年代と発達傾向を明らかにすることにより、城館遺跡の史料的活用の道は開かれる。

「縄張り調査からの方法は唯一の立場ではない。しかし、測量調査、発掘調査にしても縄張りを読み取る知識がなければ、十分の成果をあげることが難しい点もあるだろう。」



「城郭研究者は、城郭の防御性からどこまで中世の社会を読み込めるか、行き着くところまで先鋭に深く進むべきである。」

【2】縄張りからみた城郭跡の分類

中・近世移行期(戦国・織豊期)に急速に発達した同時代の城郭跡は全国に数多残る。縄張りからみた場合には、これらの城郭跡はおおよそ以下の5つのタイプに分けることができる。

○織豊系城郭、織豊系縄張り技術 [図9模式図ア]

……織田信長・豊臣秀吉と武将、同盟勢力の間で共有された縄張り技術で築かれた城郭のこと。

枠形虎口や馬出し、横矢掛かりを多用するのが特徴。石垣も積極的に導入された。例) 宇佐山城 [図10]

○武田氏系城郭 [図9模式図イ] 武田信玄・勝頼らの領国に築かれた城郭のグループ。

……甲斐武田氏と武将、同盟勢力の間で共有された縄張り技術で築かれた城郭のこと。

丸馬出しを虎口に多用することが特徴。例) 磐山城【図11】、甲斐白山城【図12】

○後北条氏系城郭【図9模式図ウ】 北条氏康・氏政らの領国に築かれた城郭のグループ。

……関東の後北条氏と武将、同盟勢力の間で共有された縄張り技術で築かれた城郭のこと。

横矢掛かりや角馬出しを多用することが特徴。例) 滝山城【図13】

○在地系城郭【図9模式図エ】 その他大勢の大名や領主が築いた、一般的な城郭のグループ。

……上記3タイプ以外の大半の事例が該当する。連郭式の曲輪が主体となり、周りに堀切・空堀、土塁を築くタイプがみられるが恒し、縄張り技術には目立った特徴や共通性は乏しい。

○近世城郭 所謂、天守や石垣などから「お城」とイメージされる城郭のグループ。

……織田・豊臣政権が天下統一する過程で、織豊系城郭が巨大化したもの。

関ヶ原の戦いから大坂夏の陣までの混乱期に各地の大名が積極的に本城・支城を築いた。

村田修三が提示した2つの系譜（平地方形居館→館城コースと、防壁・阻塞類→山城コース）から、軍事的要素の強い山城の系譜が平地方形居館の系譜を取り込む「根小屋式城郭」や、山城・丘城に様々な要素が集約される戦国大名居城（後に千田嘉博が「戦国期拠点城郭」を提唱）が各地に創出される。そして、統一政権の成立に伴い、軍事的要素の強い山城と統治拠点としての大規模な平山城などの織豊・近世城郭が全国に展開する、という変遷過程を押えておきたい。

↓

よって、同時代の城郭跡を理解する場合には、第一に織豊系城郭の「決まり事」（後述）を押えた上で、織田・豊臣氏の影響を受けた城郭とそれ以外の在地系城郭に大きく分けると理解しやすい。その上で、それぞれの特徴を把握していくことで中・近世城郭のおおよその技術的な展開を把握することができる。

第4講 城館史料学の方法論1

村田修三「城郭調査と戦国史研究」「中世の城館」

市村高男「戦国期城郭の形態と役割をめぐって」

第4講～第6講では、城館史料学の基本的な考え方や、城郭遺構の読み取り方、史料化の方法について、城館史料学の理論的な枠組みを作った村田修三、千田嘉博、木島孝之各氏の論考をもとに、縄張り図を実際に読み取りながら検討します。

【1】「城郭調査と戦国史研究」[村田修三1979]

～縄張り研究の提唱～

1979年の日本史研究会（京都）の大会報告、後に1980年3月の『日本史研究』211号に掲載。城郭跡が歴史研究の史料として活用できることを提唱し、これまで民間学として発達してきた城郭研究をアカデミズムの世界につなげるエポックとなった論文。

「……村田氏は『日本城郭史』以来、くり返し重要性が述べられながら足踏みをしていた、城館遺構から中世の社会を見る具体的方法と成果を、はじめて提示した。……この発表によって、城郭研究者の活動が、考古趣味や、城郭そのものの解明に留まらず、作成した縄張り図を歴史学の資料としていく道筋が発見されたのである。城館研究ははじめて歴史を解明していく手段として、認識されることになった。」千田嘉博「中世城館研究の構想」

※村田修三は、毛利氏などを中心に貫高制の研究など戦国史研究の第一人者。

・赴任先の奈良にて、村落における給人や小領主などの「中間層」研究の過程で、大和国東部の東山内地域と伊賀国・近江国甲賀地域の城館に注目。

・当時は在野の研究者が主体だった城郭研究に参加し、歴史学の考え方や手法を持ち込み調査事例から史料として捉えることを示した。

↓

・そうした活動から得られた成果について、莊園故地調査などを通して中世遺跡への関心が高まりつつ

あった日本史研究者に紹介し、城郭跡が史料として活用できることを示した。

1-1. はじめに—「城郭調査と戦国史研究」

「考古学の調査対象が中世まで拡大し、歴史考古学の分野が進んだ。中世史研究において文化財保存問題と結合した新しい史料学の提唱がなされてきているし、莊園調査などで着実に成果が集積されつつある。」

↓

「中世の城郭遺跡を地域史と在地構造分析の史料として活用することが必要になり、またその基礎となる調査成果が各地で報告されている。」

「……從来、城跡の調査・研究は在野の城郭研究家と呼ばれる人々の個人的な努力に負っている傾向が強く、その貴重な成果が学会共通のものになっていないと思われる。」

※村田は城郭について、防禦・攻撃を目的に構築された施設と定義づけた上で—

↓

「遺跡それ自体の構造、それを館とか城とか評価する時代的背景、山上の詰めの要害と麓の施設がペアになっているというような地理的環境、この三つの側面を総合的に考察する必要がある。だから、城郭の評価はその時代に対する評価を含み、この議論自体が城郭遺跡を歴史研究の史料として活用する嘗みの重要な一環をなしているといつてもよい。……」

と、城郭研究を「城郭遺跡を歴史研究の史料として活用する嘗み」としてその有効性を提唱する。

「城跡調査は文献・伝承調査と現地調査の二面を有するが、後者は①地域（城跡の分布、相互関係、勢力配置等の中での位置如何）、②地形（占地、麓集落や道との関係、山容など）、③縄張、④狭義の遺構（土壘・空堀の形状などの地上構造、発掘調査による埋蔵遺構）の四つの側面で行う必要がある」

↓

当時、文献史学と歴史考古学・歴史地理学などの交流が認識されつつあったが、歴史学の立場から、遺跡を歴史資料として用いる視点を提唱し積極的に実践したことは先駆的な試みであった。

→村田は、城郭に関する事象を明らかにする城郭史から、縄張り調査により城郭跡の平面構成を把握し、遺構の分析から歴史研究の史料として用いる城館史科学への道筋を開いた。村田により城郭研究は歴史学・歴史考古学・歴史地理学を横断する歴史学の一分野として明確な立ち位置を得ることができた。

これ以降の研究史は、村田が示した研究の枠組みを確固たるものにする試みとも言えるだろう。

1-2. 城跡調査から戦国史研究の実践①—山城の縄張と城主—

大和国東山内の城郭である立野城と狭川城の縄張りについて比較検討を行うことで、城郭の縄張りがほぼ国人の勢力分布に照応した特徴を示すことを論じる。

「単に城域の広狭という意味の城の規模だけでなく縄張の意味を考えることによって、戦略の規模、ひいては築城主体とその占める世界の規模を想定することがより一層可能になってくる。」

と、縄張りから築城主体の性格を読み解くことが戦国史研究に資するところ大と主張する。

→史料学としての城郭研究（城館史科学）の視点。

この他、環濠集落、平地の城館の縄張り解釈から、現地調査により土豪と村落の関係について検討することも可能であることを示す。

1-3. 城跡調査から戦国史研究の実践②—城郭立地と勢力圏—

上狭川城、水間城、平清水城、北村城、別所城、多田佐比山城、平井城など大和国東西山内地域の小規模城郭を取上げ、それらの立地と縄張が彼らの領主化の低さと村落との密着さを現したこと示す。そして、貝那木城（多田氏）、福住井之市城（福住氏）、馬場城（山出氏）の大規模三城との比較から、「東山内諸城が大規模三城と单郭小城郭に両極分解する傾向を示すこと、それが諸氏の勢力圏と照應する。」と論じた。

↓

「地域史の中に城郭を活かして考えるとき、地域史の視座（地域史の場の設定の仕方）を同時に考えることが必要となる。」

村田の提唱した視点は大名領国が成立しなかった大和国をフィールドにしたことから、城館と地域との位置づけが明確になり、城郭遺跡を地域史と在地構造分析の史料として活用する視点を明確に示すことができた。その反面、より軍事的視点が前面に出てくる大名領国における城郭政策と地域の位置づけについてはこの段階では後の課題となった。

【2】「中世の城館」[村田修三1984]

村田修三氏が『講座日本の技術史』に掲載した論文。南北朝から戦国・織豊期にかけての中世城館の変遷を、縦張り研究の成果から整理した概論。

◎縦張り研究からみた中世城郭概論

早い段階で村田修三により、縦張り研究から観た城郭の変遷史の枠組み【図14】が整理された。ここで、先に城郭の変遷について確認しておきたい。

2-1. 中世城郭の特徴—中世城郭における2つの系譜—

立地による分類……山城、丘城、台地城、平城

機能的な分類……本城と支城、番城、陣城

居住機能と政治機能も併せ持つ大規模な居城 ⇔ 臨時の限定された目的に使用する小規模な城・砦

「館から居城へ居住機能が継承され、阻塞類から砦へ軍事機能が継承されるが、この二つの流れの交錯する過程が中世城郭史である。」

A) 平地居館から館城の系譜

・平地方形居館……堀と土居を伴う屋敷地 = 防御性の高さに着目して屋敷一般から区別して館と呼ぶ。

↓

・館城……居住機能を維持したままで、以前の平地よりは要害性のある丘や台地に新設されたもの

例) 大内城、越智館、駿河丸城

→背後の丘陵が削平されて、城郭の主体となるが、本来は窓地の部分に館を設営したと見られるタイプ

丘腹に切り込んだ館城 = 丘腹切込式(=丘頂削平式)

丘腹切込式の館城の発達した形は伊賀と甲賀に見られる【図15】

例) 梅垣城、挾間城、柏原城など

「この同じタイプが天正期まで踏襲されたのは、築城主体の土豪層の支持基盤がこの中世最末期まで維持されたからであり、それを保証した体制が地域的一揆体制である。」

B) 防墻・阻塞類から山城への系譜

・防墻・阻塞……土塁・空堀・櫓・木戸等の通行障害物のすべてを含む。

↓ 例) 阿津賀志山防墻、元寇防墻、多武峰城塞群 など

↓

・山城の出現(山城Ⅰ)

南北朝は、国人領主の所領支配のための戦闘を超越した大規模な合戦のなかに、国人たちをまきこむので、広域の作戦に見合った高く深い山地での築城を強制する。

→比高が高い。

例) 天筒山城・金ヶ崎城、栄山城、西山城、竜門城、駿河安部城

・根小屋式の山城(山城Ⅱ)

在地性の強い山城、国人領主の所領支配の中枢として機能する城郭が生まれる。

その典型的な形は、居館の最寄りの比較的低い山上に築かれ、麓の居館とセットになる。

→平地の居館に対して、戦時の詰城という関係。

⇒根小屋式城郭……奥地の山城は放棄され、里に近い山城の方が主となる。

2-2. 戦国期の山城—完成された中世城郭—

村田は、2-1でみたA) B) 二つの系譜が交錯して戦国期山城が成立したとする。

1) 山城発達の動因……自然の要害性への依存度を減じて、人工でこれを補う動き。

→空堀の発達……畝状空堀群の採用

→本来は自然地形における優位性を求めて出現した山城は、山腹の遮断性だけを目的とするなら、たいていは切岸で済ませることができるから、横堀を用いることは、純張りの面での質的な向上を意図した。

↓

横堀を用いた山城は、畝状空堀群の絶頂期と推定される永禄年間以後とみられる。

→切岸の発達から土壘の採用。

土壘と空堀の対比から虎口が創出される。

枡形虎口から馬出しへ

※枡形よりも馬出しの法が高い発達段階を示すと考えられる。

2) 完成された中世城郭……武田氏、後北条氏、そして織田・豊臣氏の城郭へ

◦甲斐白山城【図12】

「前後のくり返しによる曲輪配置（要するに量的に城域を強めていくという段階）を克服し、曲輪の機能分化の必要性に応える工夫を積み重ね、機能分化した曲輪の必要最低限の組合せで最良の道具立てを活用した城郭につながる。1. 馬出し 2. 虎口曲輪 3. 主郭 の組合せ。」

例) 遠江犬居城、高天神城 丸子城 など

↓

◦玄蕃尾城【図16】

土の山城の最高水準とする城郭。

主郭の虎口機能を防禦面と攻撃面に二分して分化させ後備えを付ける、という内容に要約できる。

【3】「戦国期城郭の形態と役割をめぐって」[市村高男1991]

～純張り研究に対する隣接分野の反応と議論～

村田修三が日本史研究会大会報告で城郭跡の史料的活用を提唱したことを契機に、文献史学の側から城郭研究への問題提起や試論が盛んに行われた。その間に起きた議論について整理された論文。

3-1. 中世城郭研究の視点をめぐる論争と分類論。

1) 中世城郭研究の視点をめぐる村田への論点

「村田の一連の中世城郭研究は……氏がそれまで手がけてきた戦国史研究の問題関心や視点を導入することによって、この（中世城郭研究の大きな）うねりの頂点に立つことになったのである。」

→当時の歴史学では、軍事や近世軍学的なものへの忌避感・アレルギーが強かった。

しかし、「①中世城郭研究がここ10年ほどの間に長足の進歩を遂げたこと、②そのことが、歴史研究者に中世城郭を新たな研究対象として意識させ、大いに関心を呼び起こしたこと」などから活発な議論が行われた。

2) 軍事的性格を重視するか、支配・生活の拠点とみるか。

城郭編年の追究を目指し城郭の独自性は軍事面にあるとして遺構の読み込みを進める村田に対して、軍事施設に独自性を見出す視点や要塞研究に偏っているのではないかとする批判があり、支配・生活の拠点、権力構造や社会構造と城郭の関係をみる視点の必要性が問われた。

↓

こうした問いかけに対して、村田修三は「城を城たらしめている独自面、つまり居住一般・集落一般と区別させている特殊な面は軍事面である。この点をはっきりさせておかないと、城郭という概念が成り立たない。……史料学的客観的な物指を軍事的な純張り分析の中で確定する作業が必要だと判断して、特に軍事技術的に突出した城郭をサンプルに選んできたことも間違っていなかつたと思う」と史料学を行う上で軍事的視点を置く作業の必要性を論じた。

3-2. 多様な城郭をどのように把握するか。

上記の論争においては、

A 「遺構の分析と読み込みによる城郭編年の研究」=年代観、時間軸の追究

B 「支配や生活の拠点、社会構造との関係など城郭跡の存在形態の研究」=機能や役割など横軸の研究
という千田嘉博の「中世城館研究の構想」でも示された論点の中の2点がクローズアップされた。

※Aは考古学的発想→「文字のない史料」は、まず編年研究により尺度を考えることが第一義。考古学的手法を理解し繩張りの読み込みから編年研究に有効な着眼点をみつける視点が城郭研究者に問われこととなった。

※Bは歴史学的手法→城郭のあり方についてさまざまな史料から分析。ともすれば遺構解釈から乖離した議論に陥りやすいため、城郭研究を核として歴史研究に有効な論点を構築できるかが城郭研究者に問われることとなった。

→この村田の中世城館に対する研究姿勢を補強する形で、Bの史料的活用の具体例について、城郭研究の側から松岡進が「戦国期城郭遺構の史料的活用をめぐって」(『中世城郭研究』第2号)が提示された。曲輪の配置に権力の特質が強く反映されていることを具体的な事例を挙げて指摘した。

・「群郭型」「南九州型」や「一城別郭」型の曲輪配置について、城主と緊張関係を内包する「物主」との関係を反映したものではないかという視点。

・後北条氏領国にみられる繩張り技術の使い分けによって生じる様々な繩張り類型から、築城主体の使い分けや意図を読み解けるのではないかという視点。

一方、文献史学の間ではBの論点に高い関心を持ち、引き続き議論が進められ、城郭研究者も参加していった。

↓

城郭の場合、軍事・政治・経済・生活・文化・都市・村落・地域社会などさまざまな事象が起こる舞台となつた。それ故に多様性を問えばいくらでもトピックを立てることが可能。

・用語から城郭跡を分類する視点……城郭、陣城、寄居、切寄、小屋掛け、館、タチなど。

・「山小屋」……城郭を築くのは領主だけではない、村落の民衆も避難や立籠りのために築くとする説。

・「村の城」……集落形成の構成要素できわめて日常性の強い施設と位置づけた。

→小規模な城郭への関心を高める。

・惣構え論……城郭と城下町の構造を合わせて把握する。と同時に、町や宿の住人から城郭を見直そうとする視点

※但し、これらの視点は城郭跡の遺構の読み込みから導かれたものではなく、立地や周辺の遺跡、文献史料から概念を設定して、その概念をもとに城郭のあり方を論じていることは留意する必要がある。

→やればやるほど城郭跡の形態や遺構解釈をそれらの概念であてはめて解釈するという逆転現象に至ることに留意。

※城郭像が拡散することで、城郭研究者にとって城郭跡を研究する視点が曖昧になり混乱を招く。

↓

※こうした議論に係わるには、城郭研究者は城郭遺跡を地域史と在地構造分析の史料として活用する研究を指向する上で、軍事的視点を核に据える必要を再確認すべきである。

この点については、既に示したように、千田嘉博は「……城館遺跡の研究においては、城館の軍事面を解明することで、築城主体とそれを規定した社会の在り方を、一定程度、独自に分析することが可能になる。軍事面の特質は一方で、その社会の特質に深く関わることを認識しなければならない……」と指摘している。

歴史学的手法を城郭研究に導入した村田修三に対して、城郭跡を史料として活用する上で不可欠な「編年研究」(時間軸の研究)と「分布論」(機能や役割、地域性など横軸の研究)を進めることで、繩張り調査を基礎とする考古学的な調査法と史料整理、分析のための研究視角を提示したのが千田嘉博であり、木島孝之であった。

第5講 城館史料学の方法論2

千田嘉博「戦国期城郭・城下町の構造と地域性」
「織豊系城郭の構造」「近世大名と領国支配」

考古学的手法を用いて城郭跡から特徴や共通項を抽出し、縦年研究を通して年代観を設定することは、城郭跡を分析する上で基本となります。実際に縦張りを検討しながら、考古学的手法に則して城郭研究全体の体系を組み立てた千田嘉博と木島孝之の縦年研究と類型論・分布論研究を第5講・第6講で検討します。

【1】「戦国期城郭・城下町の構造と地域性」[千田嘉博1991]

～城郭跡・城下町の地域性～

日本列島の城郭跡について縦張りの視点から分布をみるとことで、地域間の比較によって明らかになる城郭構造の地域的特徴を論じたもの。それぞれの中世社会を背景にして、列島の城郭が豊かな地域性を持ったことを示した。

「城郭と城下町を統一的に把握することで、①列島各地の戦国期城郭・城下町構造の地域性を明らかにし、②地域から見た相対的な戦国期城郭・城下町像を提示することにある。」

1-1. 城郭地域性の研究史

- ・村田修三「城の分布」(『図説中世城郭事典』) [村田修三1987]
→各地の城郭について分布を概観すると共に、東北地方の館や南九州の台地の城を特異な「辺境型」と評価する。この他、北海道のチャシや沖縄のグスクを中世城郭と対比して論じるなど縦張りから城郭の地域性を提示する。
- ・松岡進「戦国期城郭遺構の史料的活用をめぐって」(『中世城郭研究』第2号) [松岡進1988]
→「個別城館遺構の把握とそれらの組成する城館群の体系の検討を通じて、権力体の構造とその展開過程を追求する」として、辺境型城郭について、主従関係が弱体な権力体が構築したことが主副が明瞭でないプランに反映されている、と評価。
- ・千田嘉博「中世城郭から近世城郭へ」(『月刊文化財』305号、1989年)
列島各地の在地系城郭に共通する遺構として畝状空堀群を取上げる。

「列島中心部の城郭を基準として、それ以外の地域の城を評価したのでは、「特殊に見える城郭」を正しく見ることはできない。我々は従来の中心主義的研究を克服し、地域からの城館評価を確立しなくてはならない」と分布論の課題を示す。

1-2. 城郭・城下町構造の地域区分 [図17]

- ・北海道……チャシ型の城郭の地域。
単郭の曲輪をベースにして必要な部分に堀を加えて防禦する。 例) 汐泊チャシ
- ・東北～関東・中部……東国館屋敷型城郭の地域。
広大な城域を有し、堀で区画された何某館と呼称される曲輪が集合して構成される。1辺100～300mを越え複数の屋敷をまとめて堀で区分するものがみられる。
例) 上ノ国勝山館、浪岡城、片野城、田向城
- ・関東・中部～四国・北部九州……館型城郭+機能分化型山城の地域。
平地に造られた方形館型の城郭と山地の城郭がセットで使われた。
政治・生活機能を方形館に、軍事機能を山城に機能分化した。戦国後期に一元化する動きが現れた。
 - 例1) 一国レベル中心地の城郭から村落領主級の居館まで多様な築城主体による館プランが形成。
 - 一国レベル……岩倉城と城下町、田村城と城下町 (守護所の系譜)
 - 数ヶ村レベル……菊永氏城、烏栖城、本郷城
 - 例2) 山城の展開……曲輪の機能分化と主郭を中心とした求心性の高まり。
地域支配の深化、一方では争乱状態の激化を反映して戦国・織豊期に急速に発展。
→防御性を高めるためこの地域の山城は主郭を中心とした求心性を著しく高めた。

↓

最初、主郭から尾根にそって動員兵力に見合う出来得る限り段々の曲輪を並べる「連郭」スタイルから、曲輪のひとつひとつが果たすべき役割を分担し、全体が主郭を頂点として連動するよう編成される。

→曲輪の機能分化

諏訪原城(武田氏)、杉山城(後北条氏)【図4】、玄蕃尾城(柴田氏)【図16】、勝山城(毛利氏)
・南部九州……九州館屋敷型城郭の地域

東国館屋敷型城郭と類似するが、1辺50~100m程度の曲輪内部につくられた屋敷が集合して構成される。

例) 横川城、平泉城、宮崎城

・沖縄・南西諸島……グスク型城郭の地域。

例) 中グスク、首里グスク、座喜味グスク、勝連グスク、今帰仁グスク

上記の地域区分をもとに、千田は五つの視点を提示して考察を加えている。

1、城下町(市場)の二元性

→東国・九州館屋敷型城郭と館型城郭は、館と市場の二元的な構成で共通する。東国型は大規模な館型の城郭に矩形の屋敷地が群在するのに対して、九州型は屋敷地単位の曲輪が群在して形成する点で異なる。

2、館屋敷型城郭の位置づけ

→上記の地域では、平地の支配・生活拠点の外に軍事専門の山城を発達させなかった。平地の居館自身がそのまま城郭化(館屋敷型城郭)するコースを選んだ地域。これに対して、館型城郭地域では、軍事専門の山城を創出し一元化させるまで先鋭化したと評価する。

3、館型城郭と惣構えの関係

→館型城郭では惣構えが多くみられるが、それらは加勢を受けることが前提で機能を發揮する施設と位置づける。

4、畝状空堀群の展開

→「戦国期にそれぞれの地域性の枠組みを越えて広く使用されたのが畝状空堀群であった。」と畝状空堀群の展開を取上げる。曲輪群の性格はそのままにして防御性を高めるパートとして列島各地に広く伝播したと言う視点を提示。

5、豊臣大名化と地域性の消滅

→豊かな地域性を持つ列島の城郭は中世の終焉と統一政権の出現により塗り替えられていったとする。織豊政権に参入した東国・九州の大名は「城わり」を受け、存続を許された城も豊臣氏の奉行によって、織豊系城郭に改修される。これによって地域性は払拭され豊臣大名にふさわしい近世城郭・城下町が創出されたと位置づけた。

※但し地域性については東国や九州館屋敷型城郭の分布した地域などの旧族大名の間で創出された「亞流の織豊系城郭」が、統一政権と各地の地域史との関連性を城館から語る視点を提供する。

【2】「織豊系城郭の構造」[千田嘉博1986]

～縄張り技術からみた城郭跡の編年研究～

城郭跡を史料として活用するために不可欠な「編年研究」について、遺構を確認しやすい織田氏・豊臣(羽柴)氏・徳川氏の城郭遺構の分析を行い、城郭の縄張り発達を理論的に把握することに成功した研究。これにより、織豊系城郭から近世城郭への「年代軸」が明確に示された。

→城郭研究における縄年研究を飛躍的に発達させた代表的な論文。縄張りの発達について、虎口と堀・石垣の発達を踏まえて、織豊系城郭の虎口の折れと空間に着目することで縄年モデルを創出した。

1-1. 縄張発達史の再検討

→「縄張の発達史を掴むには、城の防禦された出入り口である虎口と堀・石垣の発達を捉えることが不可欠である。」

1、虎口の発達

「縄張りの中で最も激しく変化し、著しく発達したのが虎口である。……戦国期後半から織豊期にかけて急速に発達した。その背景には当然、戦闘方法の変化が存在し、それは動員力の増大や、兵農分離等の社会の相対的な変化に規定された。」

→単純な平虎口から、横矢を効かせたり土橋を渡らせるもの、そして虎口前にテラス状の空間を造り直接進入させない縄張りが創出され、枠形虎口と馬出しが創出された。[図18]

2、堀・石垣の発達……堀切・豊堀から畝状空堀群の発達、それに代わる横堀・石垣の発達。

畿内・中部地域では、畝状空堀群から横矢掛けと横堀の縄張りが一般化する。

→総石垣と横堀により、曲輪群の機能分化を明確化し、城郭全体が連携して防禦することを可能にした。

それ以外の横堀が発達しなかった地域では、豊臣氏の統一前後まで畝状空堀群が使用される傾向を指摘。

1-2. 織豊系城郭の検討とその変遷

虎口の形式分類に縄張の機能分化の評価を合わせることで、以下のように分類作業を進めている。

・第1段階の様式化は、問題になる虎口を縄張から抽出し、「折れ」「空間」に分解して考える。折れでは虎口部分の星線を屈曲させ、城への進入ルートを直角に何回曲げるかを検討する。空間では虎口と密接に結びついて存在し、固有の虎口空間として機能する曲輪の有無を検討する。

・第2段階の模式化ではこの虎口がそれ以外の城郭構成要素とどう噛み合って縄張全体を発達させたかを焦点に、虎口プランと堀・石垣の発達度を合わせて図化し、検討する。

・堀・石垣は、第1段階：単純な堀切、第2段階：堀切と部分石垣の使用、第3段階：横堀もしくは総石垣の使用と設定する。

その結果、下記の通り、5類型に分類する [図19]

■第1類型 松平城タイプ……城道0折・0空間型の単純な平入り虎口を持つ城郭。折れも虎口空間も持たない。例) 松平城

■第2類型 品野城タイプ……城道1折・0空間型の食違い虎口を持つ城郭。

例) 品野城 →テラス状に伸びた虎口受けの小曲輪を前面に持つ。

■第3類型 宇佐山城タイプ……城道2折・0空間型の枠形虎口を持つ城郭。枠形虎口の創出。

例) 宇佐山城、多喜山城、岐阜城千畳敷→主郭星線より全体的に虎口星線が大きく張り出してくい違う。

■第4類型 城道2折・1空間の虎口を持つ城郭。安土城を画期として虎口空間の出現、城郭の機能分化が明確化する

第4類型A 安土城タイプ……城道2折・1空間型、攻撃的な外枠形を発展させた虎口。

例) 安土城、七尾城、鳥羽山城 →外枠形(内枠形)と虎口後方の小曲輪(虎口空間)がセットになる。

※木島孝之は千田の虎口空間をL字の折れを持つ星線が前に張り出して形成されたものと解釈した。

第4類型B1 丸山城タイプ……城道2折・1空間型、横堀使用の城郭に第4類型Aの虎口をそのまま使用する。

例) 丸山城(三重県) →出撃を意図した枠形虎口の外に、横堀で仕切られた土橋が配される。土橋に制限された城道により、外枠形の出撃効果が相殺される問題を持つ。

第4類型B2 大森城タイプ……城道2折・1空間型、城道2折の虎口が虎口空間ごと横堀を越えて対岸に開口する。

例) 大森城、鳥越城、土山城

→第4類型Bは、安土城でみられた虎口形式を横堀と組合せて使用。虎口曲輪が馬出し化する過渡期と評価できる

■第5類型 総石垣・横堀による縄張りが貫徹し、防禦ラインが多重化する。

そして、虎口曲輪の一般化が進展し、虎口空間を重ねて城郭全体を形成する。

→虎口機能が再編成（虎口曲輪の一般曲輪化）され、全ての曲輪で防禦と反撃を行う近世城郭に到達する段階。

第5類型A1 豊臣大坂城タイプ……防禦ラインの設定と外堀形を完成させるが虎口空間化するには至らない段階

例）山崎城、堂木山城、豊臣大坂城

→外堀形後方曲輪の虎口空間化、防禦ラインの多重化、横堀と組合せたA型出撃虎口前の土橋の拡幅が進展。

第5類型A2 高取城タイプ……2折・1空間の関係が重層的に展開して城郭が造られる段階。

全ての曲輪が虎口空間として機能し得る縄張となる。文禄・慶長期の倭城が初見。

例）熊川（ウンチョン）城、西生浦（ソセンボ）城、高取城、熊本城

→外堀形の使用と虎口曲輪の一般曲輪化を貫徹した城郭。

曲輪の続く限り、防禦と反撃をくり返す完成された城郭（いわゆる近世城郭）に到達。

第5類型B1 玄蕃尾城タイプ……馬出外側の虎口は虎口曲輪が突出して横堀を越えた織豊系城郭の発達系列に規制され地続きだが、馬出後方の曲輪とは分離が確立する段階。

例）玄蕃尾城、東野山城、岩津城、松根城

→外側虎口前面に堀を巡らさない一部地続きの馬出しを持つ城郭。

第5類型B2 岩崎城タイプ……馬出しから外へ出る虎口部分も堀が巡り、四方に堀を備えた形態になる段階。全ての曲輪が虎口空間として機能し得る縄張となる。文禄・慶長期の倭城が初見。

例）岩崎城、末森城、沓掛城

一見すると、武田氏・後北条氏の馬出と類似するが、織豊系の馬出は必ず三方に土壘を備える点が異なる。

第5類型B3 名古屋城タイプ……多折・多空間型。徳川氏の手で織豊系馬出の再編成が行われる段階の城郭。

例）名古屋城、徳川氏大坂城、二条城、駿府城

※天下普請により創出された事例が中心。

→馬出という本来虎口機能を専有する曲輪を備えながら、専有性を否定して虎口空間の一般化へ。馬出から外へ出る虎口部分がくい違い虎口になる。そして曲輪内の堀が仕切りとなり墨線外側に横堀として収斂する。

→外堀形（A類）と馬出（B類）が統一させ、完成した近世城郭を出現。

※完成形としての「二条城」

→一見すると退化したようにみえるが、一連の発展形態が最も洗練された縄張。

◎これらの変遷モデルに年代をあてはめて、「織豊系城郭編年図」が完成。

「織田氏・豊臣（羽柴）氏・徳川氏の城郭が強い規範性を持ち、その政権下の諸城に一貫して強い影響力を有していたことが理解された。……戦国期から近世初頭の城郭の変遷を概観すれば、さまざまな発展方向を持っていた中世城郭が、織豊系城郭の縄張に統一されていく過程といえるのである。」

織豊系城郭の縄張りの法則について、虎口プランの発達・変化の運動が最終的に下位曲輪の再生産と言う方向に展開する変遷過程を、虎口の折れと空間から解明した。

※織豊系（→近世城郭）と非織豊系（在地系）を明確に分ける指標を打ち出したことの重要性。城郭跡を史料として読み解く上で必要不可欠な指標を導き出した、偉大なる「理念先行型研究」

【3】「近世大名と領国支配」[千田嘉博2001]

～織豊系城郭の集大成としての近世城郭～

城郭と城下プランを一体的に分析することで、織豊系城郭から近世城郭へ、近世城下町の全国的成立の

位置づけを行い、近世幕藩体制の成立過程を論じたもの。戦国→織豊→近世幕藩体制と続く時代の編成を城郭遺跡から論じる一連の論考はこれにより一つの閉じた体系として完成する。

1-1. 求心型城郭プランの出現

☆戦国期城郭の三つのプラン—並立型城郭プラン、単純連郭型プラン、求心型城郭プラン【図20】

並立型城郭プラン

……曲輪相互に顕著な機能分化が見られず、厳重に防禦された屋敷が相似的にゆるやかな階層性をもつて群集する

単純連郭型城郭プラン

……並立型、求心型の中間形態。地形に沿って曲輪を並べる。

求心型城郭プラン

……本丸を核にして階層的に二の丸、三の丸が配置された求心的な構造。

→「從来の城郭研究では主流として扱われてこなかった並立型城郭ことが本来、基調をなした中世城郭のプランであり、求心型城郭は並列型城郭の変革によって生み出された後出のプランであったことがわかる。」

※その違いは何に起因したものか？

→「およそ武家権力にとって軍事力の保有とは、本質的な権力の特質であった。城郭はそうした軍事力の総体が集約された建造物であって、城郭がどのような軍事力を發揮したかは築城主体の権力の特質と分かちがたく結びついていた」



三つのプランを提示した上で、後出の求心型城郭の出現には、大名を頂点とした求心的な権力機構の変化が必要であり、そうした延長上に近世城郭が生まれるという見通しを示す。

1-2. 織豊系城郭の成立と全国展開

☆近世城郭の虎口形式【図21】

千田は「織豊系城郭の形成」にて示した5類型をもとに、近世城郭の形成について6類型のモデルを提示した。

- 1) 岐阜型（織豊系城郭第3類型・くい違ひ虎口）

……岐阜城千畳敷、宇佐山城、勝龍寺城など
- 2) 安土型（織豊系城郭第4類型・単独外郭形）

……安土城、七尾城、山崎城、賤ヶ岳陣城群など
- 3) 豊臣氏大坂型（織豊系城郭第5A類型・連続外郭形）

……豊臣大坂城、徳島城、石垣山城、肥前名護屋城など
- 4) 聚楽第型（織豊系城郭第5B2類型・馬出し）

……聚楽第、清須城、広島城、会津若松城など
- 5) 江戸型（織豊系城郭第5C3類型・仕切馬出し）

……江戸城、今治城など
- 6) 元和型（織豊系城郭第6類型・定型外郭形）

……高槻城など

1-3. 近世城郭・城下プランの展開

並立型城郭から求心型城郭への全国的な転換が、統一政権の拠点城郭を規範とした城郭によって成立した点を指摘する。

「全国の主要近世城郭プランを検討してみると、一見それぞれの城郭は立地した地形を最大限利用し、相互の関連性なく築かれたように思われても、実は安土・大坂・聚楽第・江戸といった統一政権の拠点城郭を規範とし、主虎口プランを分有する形で各地の近世城郭が形成されたことが明らかである。」



その理由として、千田は次の2つを示す。

- 「そうした城郭プランと城下の建設が、中世的な重層的で分立的な権利と権力機構を止揚し、大名による一

元的な権力を確立するための必要不可欠な手段のひとつだったからである。」

- 「……身分制の確立をはじめとする、統一政権に参加した全国の大名に共通した意図こそが、城郭そして城下町プランに共通して示されたものといえよう。」

上記の視点を示すことで、近世城郭に貫く軍事的機能を前提として、統一政権の性格や築城に求めた政治的象徴性を読み解くことの重要性を示す。

「外拠形や馬出しといった虎口は、軍事的機能として強い求心性を發揮した。その城郭の求心性を軍事面だけではなく、近世的な身分編成を達成する装置として読み替えて転換したところに、織豊系城郭が近世城郭の原形になり得た理由があった。」

◎戦国期城郭や守護所・戦国期城下町が創出された地域社会からの転換が、織豊系城郭の建設が画期となったことを踏まえて、城郭遺跡からみた場合に、近世封建制社会の成立は全国的な織豊系城郭・城下体制の成立と評価する。

「その画一性は、近世城郭と城下が統一政権の成立と重層的土地所有の止揚、兵農商といった身分制の確立・武士の城下集住といった近世封建制を成立させた基本的枠組みの総決算ないしはそれを実現させるための不可欠な手段として建設されたからであり……将軍を頂点とした近世幕藩体制の理想都市建設という構想を共通したからにはほかならなかった。」

第6講 城館史料学の方法論3

木島孝之「織豊系城郭における虎口プラン変遷案作成の試み」

「倭城と国内城郭の縄張り構造からみた近世初頭期大名権力の様相」

村田修三が示した城郭研究の理論的枠組を千田嘉博が整備した同時に、木島孝之は建築史・文献史学・歴史考古学を駆使し、織豊・近世城郭を中心に行われた城郭遺跡の史料的活用による歴史研究を実践しています。木島孝之の論文とともに、朝鮮出兵から豊臣秀吉死後勃発した関ヶ原の戦い、元和偃武までの文禄・慶長期に急激な発達をみせた近世城郭を素材に、縄張り研究の視点から類型論と分布論から近世初頭の幕藩体制を明らかにする方法論、城郭遺跡を史料として活用する視点を学びます。

【1】「織豊系城郭における虎口プラン変遷案作成の試み」[木島孝之2000]

千田嘉博の織豊系城郭縄年案（千田編年）を優れた理論先行型研究と位置づけると共に、この研究視点を継承し、織豊系城郭の縄張の発展過程において、外拠形虎口の「腕」を城外側へ振り出す“城外側に向けての出撃性の運動”の再生産が基幹的法則の一つとして連続と流れていることを「虎口プラン変遷案」にて提示した、新たな視点の縄年研究。

千田嘉博「織豊系城郭の構造」（千田論文）の画期的な成果を、「虎口プランの分析を通して織豊系城郭の縄張りの基幹的法則、即ち、織豊系城郭では虎口プラン（特に外拠形虎口）の発達・変化の運動が最終的に下位曲輪の再生産に結実した、ということを解明した点にある。」と評価。

→今後とも城郭研究の根幹理論の一つとして、永く共有・継承すべき財産とする。

その上で、「織豊系城郭の縄張りの基幹的法則に関する研究視点」を継承しつつ、新たな変遷案を示す。その前提として、「変遷案」を抽出するために従来の縄年研究とは若干異なる六つの前提条件を設定する。

- ①虎口プランの変遷案は曲輪の機能分化の評価を含めて行う。
- ②事例の採択においては、当面は城郭遺構の構築・改修年代に固執しない。
- ③発展過程が理論的にみて連続的関係にあると思われる虎口プランの検出を最優先事項とする。
- ④織豊系城郭の虎口形状の変遷の流れを大掴みに掌握するものであり、構築・改修年代を判別するものとしない。
- ⑤当面は作事の問題（城門の位置、構造等）を考慮に入れない。
- ⑥主要部に用いられた大型の虎口を主要虎口（複数可）と捉える。

→織豊系城郭の縄張りの根底に流れるはずの基幹的法則を導くために、弊害を承知の上で種々の要素を大胆に切って捨てるこであえて「理論先行型」研究を進める基礎的な作業が必要とする。

変遷案の着眼点は以下の通り。千田の視点を継承し運動として読み解くための着眼点とする。[図22]

1 「城外側へ向けての出撃性の運動」を読み解くために、鎌手型に屈曲させた虎口部分の墨線を「腕」と定義する。→千田編年における「折れ」の視点を継承し、若干異なる概念として提示。

2 「腕」によって囲われる領域内の生じる空間について、

門程度の幅を持つ通路状の形態を「虎口内通路状空間」、

門よりもかなり大きな幅を持つ通路状の形態を「虎口内空間」、

さらに拡大した創出された曲輪を「虎口系曲輪」、統合された巨大曲輪を「虎口系大曲輪」と定義する。

→千田編年における「虎口空間」→曲輪化という視点を、虎口内通路状空間▶虎口内空間▶虎口系曲輪と
いう発展過程として捉えなおす。

千田編年のI類～V類の分類に対して、第I類～第IX類に分けて変遷案を提示。[図23]

■第I類：虎口プラン不明確タイプ

虎口を判別できるような明確な普請物がなく、塀・柵列等の作事物の設置によって虎口位置が定まったと推定されるタイプ、形状は平入りに類する平易なもの。

■第II類：平入虎口タイプ

平入り虎口であるが、普請物によって虎口の位置が明確となる段階。平入りながら虎口位置の不動化を果たす。
→「普請物による虎口の位置の不動化こそが、「縄張り」という行為に対する本格的な意識の覚醒であるといえる。」

■第III類：食違い状平入虎口タイプ

平入り虎口であるが、虎口を形成する墨線の片方全体が前後に僅かにずれるプラン。
→完全な食違い虎口に至る試行錯誤の段階を示す。

■第IV類：食違い虎口タイプ

虎口を形成する墨線の片方全体を前後にずらしたプラン。虎口そのものの形状による工夫が強く意識された段階。

■第V類・第VI類：独自的な虎口プラン（外枠形虎口・内枠形虎口）の出現。

片方の墨線の一部を曲げる（一步振り出す）ことで折れを創出する動きが現れるタイプ。城外側に曲げ「外枠形虎口」を創出する系統（α系統）と城内側に曲げ「内枠形虎口」（β系統）を創出する系統に分化する。

■第VII類：「虎口内空間」を持つ虎口プランの発生。

「外枠形虎口」「内枠形虎口」が完成した後、多人数による「外枠形虎口」の出撃性と「内枠形虎口」の迎撃性を強化するために、「虎口内通路状空間」を拡充して「虎口内空間」とする動きが強まったタイプ。

→「城外側に振り出す「腕」と、勢溜機能を担う「虎口内空間」が一体となった外枠形虎口は、背後曲輪の橋頭堡として発展する。その際、α系統では、横堀の使用との関係で、虎口の前面に横堀を控えた場合のB系と、横堀を控えない場合のA系に分化する。」

■第VIII類：「虎口内空間」の「虎口系曲輪」化。

「虎口内空間」が更に拡充して「虎口系曲輪」となる段階、この運動を必要に応じて繰り返することで下位曲輪が再生産され続ける仕組みが創出された段階。虎口の前面に横堀を控えた場合のB系と、横堀を控えない場合のA系に分化する。

→大人数による全方向への連続的な出撃と重層的な防禦の確立。「外枠形虎口」の出撃性を追求し続けた一連の運動の到達点と位置づける。

※既存の中世・戦国期城郭の理念においての「曲輪」に対して、「城外側へ向けての出撃性の運動」の產物としての「曲輪」との違いに注意すること。

既存の曲輪を、「腕」の理念によって「虎口系曲輪」で昇華・再編することが近世城郭の成立過程。

■第IX類：「虎口系曲輪」群の整理・統合と「虎口系大曲輪」の創出。

主郭を囲む「虎口系曲輪」群や馬出が整理・統合され、「虎口系大曲輪」に再編される、いわゆる「輪郭式」の縄張りに到達する段階。

→一見すると、形骸化・衰退傾向と映るが、軍事力・経済力を高次に集約した近世国家の上で、絶大な遮断施設（大堀・高石垣、大土壘）の発達と、大名当主を頂点として後世可能となった大軍団の出現により整理・統合した「虎口系大曲輪」の創出へと進んだ段階と捉えられる。

これにより、織豊系城郭の縄張りの変遷を、「城外側に向けての出撃性の運動」→「運動を必要に応じて繰り返すことで下位曲輪が再生産される」ことを確認。千田編年を読み直す、理論先行型の編年研究。

【2】「倭城と国内城郭の縄張り構造からみた近世初頭期大名権力の様相」[木島孝之1999]

～近世城郭の類型論・分布論による近世初頭幕藩体制研究～

【1】でみた新たな視点の編年研究と同様に、城郭跡を新たな歴史像を提示する史料として取り扱うための類型論・分布論として提示した研究。(朝鮮役の普請と戦闘経験、関ヶ原戦後の築城ラッシュから) 織豊系縄張による全国席巻が一挙に本格化した慶長期について、各大名領での織豊系縄張技術の適用の仕方に注目すると、決して一律ではない状況が認められること、とりわけ豊臣系新興大名領・親豊臣派旧族大名領と旧族大名領の間には、看過すべきではない大きな差異が認められることを示した。

2-1. 《主郭の求心性》と《縄張り技術》による城郭の縄張のタイプ化の基準

木島は、織豊系城郭の特徴をもとに指標を設定し、《主郭の求心性》《縄張り技術》により細かなタイプ化作業を行うことで、西南日本の多くの城郭跡を整理する指標を導き出した。

《主郭の求心性》と《縄張り技術》による城郭の縄張のタイプ化は、「各大名領国内の各居城の縄張りを統一的に捉えるため」の類型論・分布論のための指標として設定したものである。

I 《主郭の求心性》による分類 [図24]

「城郭の縄張の骨格は、主郭（城内で最高位の曲輪）に対し他の曲輪がどのような関係を以て配されているか、すなわち《主郭への求心性》によって定まるといつてもよい」と位置づける。

下記の通り、6つの類によるタイプ分けを示す。

在地色

↑

D類 ……群郭型のタイプ 例) 伊作城（島津領）

D - □類……平野部水郷地帯などで方形居館が群郭をなすタイプ 例) 佐賀城（鍋島領居城）

C類 ……単郭型であり、曲輪の機能分化がないタイプ 例) 梶峰城、毫岐龟尾城（松浦領）

C - □類……平地の方形居館のタイプ 例) 富隈城（島津領）

B類 ……複数の曲輪からなり、第二郭以下が主郭を重層的に保護する。

例) 三丘城（毛利領）

A類 ……B類の条件を満たす上に、枠形虎口、食違い虎口、馬出により区別を特別に明確にしたタイプ。

例) 福岡城（黒田領居城）、小倉城（細川領居城）、一戸城（細川領支城）

↓

織豊系

II 《縄張り技術》による分類 [図25]

具体的な細部を読み解くために《縄張り技術》によって分類する必要があるとする。

「加工技術の系譜（中央政権（織豊・徳川政権）の縄張り技術か否か等）により幾つかに分類する必要がある。」とする。

在地色

↑

c

b [1 虎口の形状] [2 曲輪の墨線の形状] [3 石垣の形態] [4 慣構えの形態] [5 建築物]

a

↓

織豊系

※あいまいな場合は、a or bと標記し、遺構が破壊されているなど不明な場合は、／で標記。

その上で、《立地》+I《主郭の求心性》とII《縄張り技術》によるタイプ化標記を行う。

- 例) 岩国城（毛利領支城）ならば、[山城型A類a・a・a・c・a系統] タイプ
梶峰城（松浦領支城）ならば、[山城型C類c・c・c・c・c系統] タイプ

さらに、《縄張り技術》の系統をポイント化して再タイプ化。

- 例) 岩国城（毛利領支城）は、[山城型A類a・a・a・c・a系統] → [山城型A類4a・0b・1c] と示す。
梶峰城（松浦領支城）ならば、[山城型C類0a・0b・5c]
↓

慶長期の大名領単位で本城・支城のタイプ化・再タイプ化により、築城主体の性格（織豊ご在地色）の程度を数値化。

*木島の研究は、千田の示した「考古学的手法」について、独自に具体的にタイプ分けとそのポイント加算による処理で多くの城郭事例について各タイプの偏りにより明確に分類される指標を設定して実践したもの。

2-2. 慶長期（関ヶ原戦後）における九州大名衆の居城の類型化

実際に西南日本の諸大名の居城を中心に類型化を行っている。以下の事例について《主郭の求心性》と《縄張り技術》の指標からタイプ分けを行う。

福岡城（黒田氏）[図26] …… [丘城型A類a・a・a・a・a系統] → [山城型A類5a・0b・0c]

熊本城（加藤氏）[図27] …… [丘城型A類a・a・a・a・a系統] → [丘城型A類5a・0b・0c]

唐津城（寺澤氏）…… [丘城型A類a・a・a・a・a系統] → [丘城型A類5a・0b・0c]

萩城（毛利氏）[図28] …… [平城型A類a・a・a・a・a系統] → [平城型A類5a・0b・0c]

佐賀城（鍋島氏）[図29] …… [平城型D-□類a・a・a・a・a系統] → [平城型D-□類5a・0b・0c]

鹿児島城（島津氏）

居館部…… [平城型C-□類a・a・a・c・a系統] → [平城型C-□類4a・0b・1c]

上之山城…… [平城型D-□類c・b・c・c・c系統] → [平城型D-□類0a・1b・4c]

人吉城（相良氏）[図30] …… [丘城型D類a・a・a・b・a系統] → [平城型D類4a・1b・0c]

飫肥城（伊東氏）…… [丘城型D類a・b・a・b・a系統] → [平城型D類3a・2b・0c]

原城（有馬氏）…… [丘城型D類a・a・a・c・a系統] → [平城型D類4a・0b・1c]

平戸城（松浦氏）…… [丘城型C類a・a・a・b・a系統] → [平城型C類4a・1b・0c]

2-3. 大名衆の類型間における縄張りの差異と大名権力

2-2を受けて、「《主郭の求心性》と《縄張り技術》による城郭の縄張りのタイプ化の基準」に基づきそれぞれの事例をタイプ化・再タイプ化。

その結果、《縄張り技術》a系統を指標とみると、すべての事例は3～5aの範囲に収まり、織豊系の縄張り技術を多用する点で共通することがわかる。

一方、《主郭の求心性》でみると、

・織豊系の縄張り技術を駆使しつつ、主郭への求心性を追求した縄張りを有するグループ（第1類型）

→福岡城、熊本城、唐津城、萩城

・在地系縄張りが持つ主郭への求心性の未熟さを克服しないまま、織豊系縄張りの技術的パーツのみ抽出し受容したグループ（第2類型）

→佐賀城、鹿児島城、人吉城、飫肥城、原城、平戸城

に大別される。

そして、築城主体をみると、第1類型は豊臣系新興大名・親豊臣派旧族大名の居城、第2類型は旧族大名の居城に明確に分かれる。大名居城の類型と大名衆の政治的出自に明確な相関関係がみとめられることを確認……①

2-4. 九州・中国大名衆が渡海し築城した倭城の縄張り [図31]

2-3. でみた差異をみせた九州・中国大名衆は、朝鮮役ではどのような様相を示したのか？

↓

◎倭城（とりわけ母城クラス）の縄張りの特徴として以下の点を指摘している。

- 1) 高石垣を用いた総石垣
- 2) 瓦葺・疎石・塗り込み造りの重量建築物を多用する
- 3) 港湾と周辺の丘陵を囲い込む壮大な登り石垣（又は土壘）を有するものが多い。
- 4) 枝形虎口・食違い虎口・横矢掛・高石垣等の織豊系の最新の技術を過剰なまでに駆使しつつ、主郭への強い求心性を創出した。

→織豊系の最新の技術を過剰なまでに駆使しつつ、主郭への強い求心性を創出する。その上、新旧あらゆる技術を積極的に併用した強力な遮断線を構築……国内の様相とは異なる対外の異民族戦争の極度の緊張を反映。



九州・中国大名衆は、その政治的立場や出自に関係なく織豊系の縄張り技術・理念を十分に修得……②

2-5. 九州大名衆の居城と倭城の縄張からみた近世初頭大名権力

①と②を踏まえて、九州における「全大名家の豊臣化」とも言える織豊系縄張り技術の受容過程について、朝鮮出兵以前から朝鮮出兵でピークを迎え、戦後一部後退とも言える「振り返し」的現象が起こったことを指摘する。【図32】

1) 朝鮮役最中にあっては、倭城構築（肥前名護屋城を含む）によって大名間における織豊系縄張りの技術的・理念的格差が一時的状態で大幅に解消された。そして、織豊系縄張りを通じて「全大名家の豊臣化」が、各家の権力事情を凍結する形で過剰なまでに進展した。

2) 朝鮮役終焉後の国内では、特殊事態を背景に過剰に進展した「豊臣化」に、振り返しが生じ、それは大名家居城の類型と政治的出自の相関関係となって具現化した。

以上の考察から、近世初頭大名権力の様相を解明する上で、倭城と国内城郭の縄張り構造に関する研究を共同歩調で進めてゆくことの意義と必要性を提示する。

→中世・戦国期城郭から織豊系城郭を中心とした同時代社会を読み解く傾向の強い村田修三、千田嘉博の研究を踏まえつつ、城郭遺跡は廃城時期の様相を如実に示す一級史料であるという認識のもと、城郭遺跡を到達点である近世初期大名権力の様相を読み解く史料として活用する。史料学としての城郭研究（城館史料学）の有効性を踏まえた研究を進める。

【講義で用いたテキスト】

第1講

千田嘉博「中世城郭の立地とかたち」〔『遺跡学研究』第4号（日本遺跡学会、2007年）〕

千田嘉博「中世城郭の研究」〔前川要編『中世総合資料学の提唱』（新人物往来社、2003年）〕

第2講

千田嘉博「中世城館研究の構想」〔初出：石井進・萩原三雄編『中世の城と考古学』（新人物往来社、1995年）〕

村田修三「中世の山城」「城の発達」「城の分布」〔村田修三編『中世城郭事典』一・二・三（新人物往来社、1987年）〕

村田修三「史料としての城館」〔網野善彦・石井進・谷口一夫編『中世史料論の現在と課題』（名著出版、1995年）〕

村田修三編『中世城郭研究論集』「序文」（新人物往来社、1990年）

村田修三編『新視点中世城郭研究論集』「序文」（新人物往来社、2002年）

第3講

千田嘉博「中世城館縄張り調査の意義と方法」〔『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集（国立歴史民俗博物館、1991年）〕

第4講

村田修三「城跡調査と戦国史研究」〔『日本史研究』211号（日本史研究会、1980年）〕

村田修三「中世の城館」[『講座日本技術の社会史』第六巻土木（日本評論社、1984年）]

市村高男「戦国期城郭の形態と役割をめぐって」[峰岸純夫編『争点日本の歴史』4 中世編（新人物往来社、1991年）]

松岡 進「戦国期城郭遺構の史料的活用をめぐって」[『中世城郭研究』第2号（中世城郭研究会、1988年）]

第5講

千田嘉博「戦国期城郭・城下町の構造と地域性〔含 質疑・討論〕」[初出：『ヒストリア』129号、（大阪歴史学会、2000年）]

千田嘉博「織豊系城郭の構造-虎口プランによる網張編年の試み」[初出：『史林』第70巻第2号（史学研究会、1987年）]

千田嘉博「近世大名と領国支配」[初出：町田章編『考古学による日本歴史』5 政治（雄山閣、1996年）]

第6講

木島孝之「序章」[『城郭の網張り構造と大名権力』（九州大学出版会、2001年）]

木島孝之「織豊系城郭における虎口プラン変遷案作成の試み 一千田嘉博「織豊系城郭の構造」の研究視点を継承してー」[『愛城研報告』第5号（愛知中世城郭研究会、2000年）]

木島孝之「倭城と国内城郭の網張り構造からみた近世初頭期大名領国の様相」[『倭城の研究』第2号（城郭談話会、1998年）]

【講義の構成】

◎基礎編

第1回 はじめに 頭影から研究へ 一城郭跡の保存・整備と城郭研究のあゆみー

第2回 網張り研究から城館史科学へ 一城郭跡を史料として捉える歴史研究の展開ー

第3回 城郭跡の調査・解釈・研究手法について 一城郭跡を理解し読み解くことー

第4回 城郭史科学の方法論1 村田修三「城郭調査と戦国史研究」ほか

第5回 城郭史科学の方法論2 千田嘉博「織豊系城郭の構造」ほか

第6回 城郭史科学の方法論3 木島孝之「織豊系城郭における虎口プラン変遷案作成の試み」ほか

◎現地編

第7回 城郭跡を歩き・読み取り・解釈する（第7回～第9回通し）。豊後高崎城の現地踏査と網張り解釈について解説。

第8回 同 上

第9回 同 上

◎応用編

第10回 城館史科学の視点と中・近世史研究1

城郭跡から何がわかるか 一豊後高崎城と天正・文禄期の大友氏ー

第11回 城館史科学の視点と中・近世史研究2 戦国期城郭と大友氏領国・城督制

第12回 城館史科学の視点と中・近世史研究3 筑前立花山城からみた朝鮮出兵と豊臣政権

第13回 城館史科学の視点と中・近世史研究4 城郭遺跡の年代観と歴史考古学

第14回 城館史科学の視点と中・近世史研究5 近世城郭と慶長・元和期の初期藩政

第15回 調査レポートの報告とまとめ

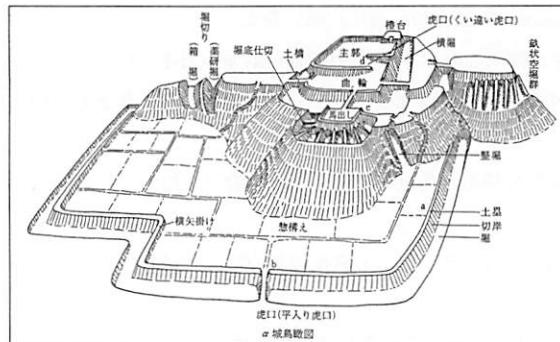


図1 城郭の縄張り関連用語

図2 歴史まちづくり法の事業概要（概要パンフレットより転載）



図4 武藏杉山城縄張り図 西股継生：調査作図

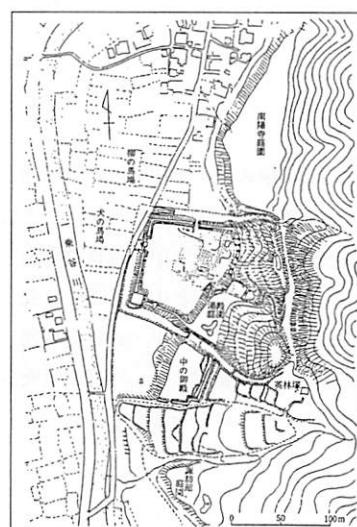


図5 朝倉氏館繩張り図 八巻孝主・調査作図

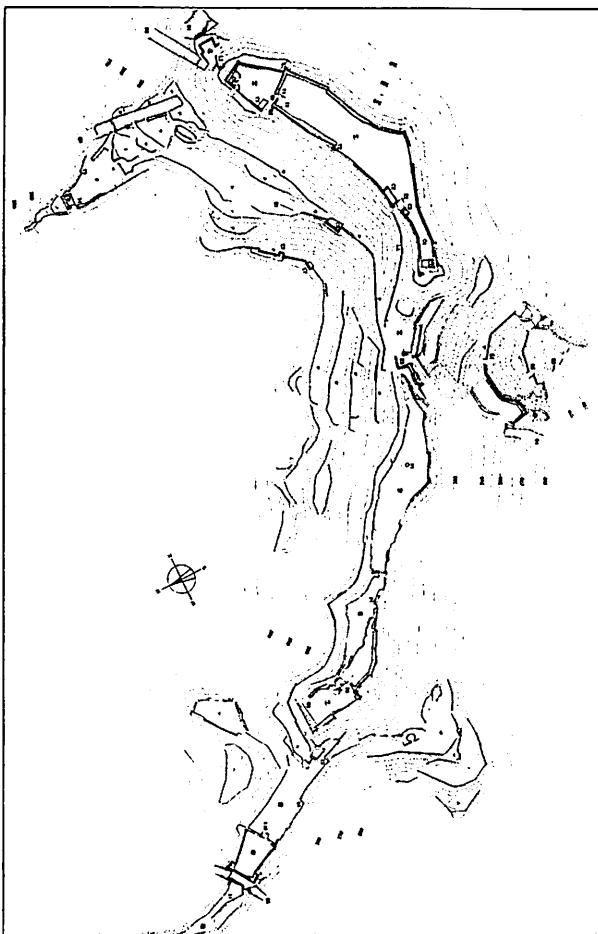


図3 肥前岸嶽城縄張り図 木島孝之：調査作図

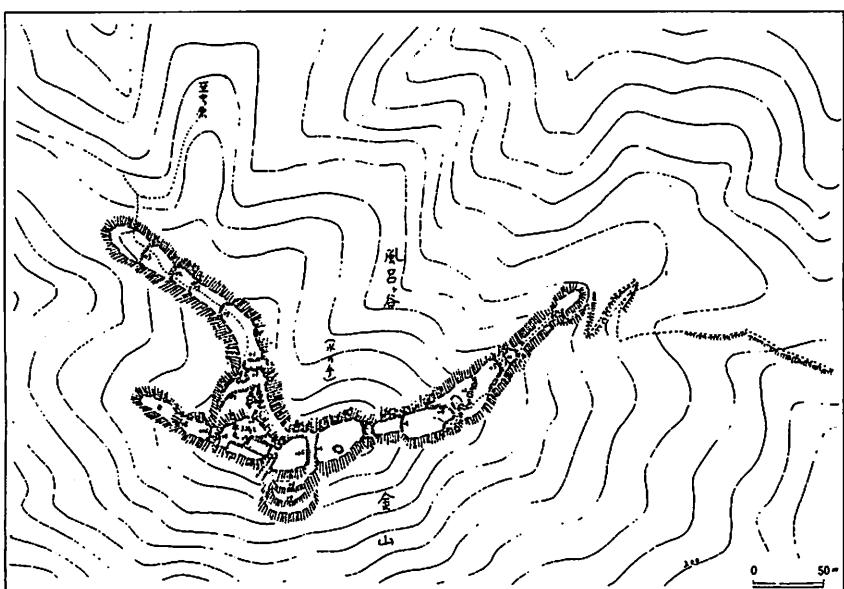


図6 平井詰城縄張り図 山崎一：調査作図



図7 調査の道具
(千田嘉博・小島道裕・前川要「城館調査ハンドブック」より転載)

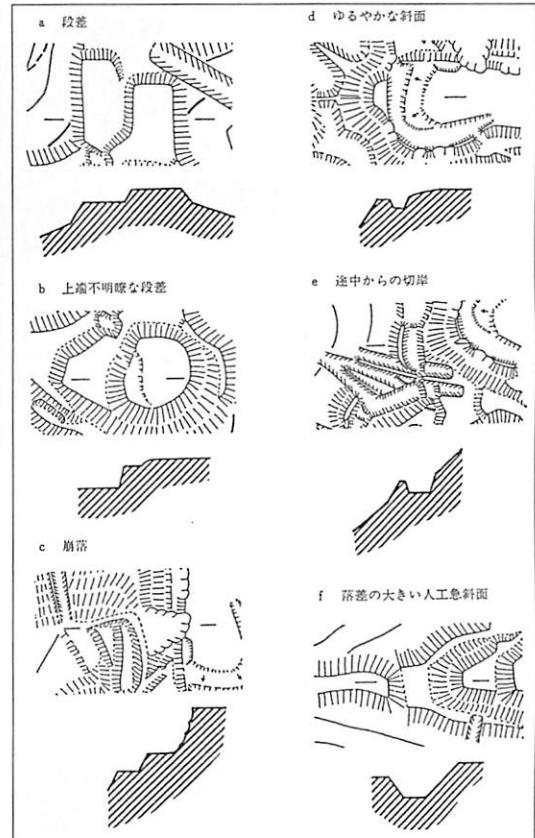


図8 遺構標記の基本 (文献 [千田1991] より転載)

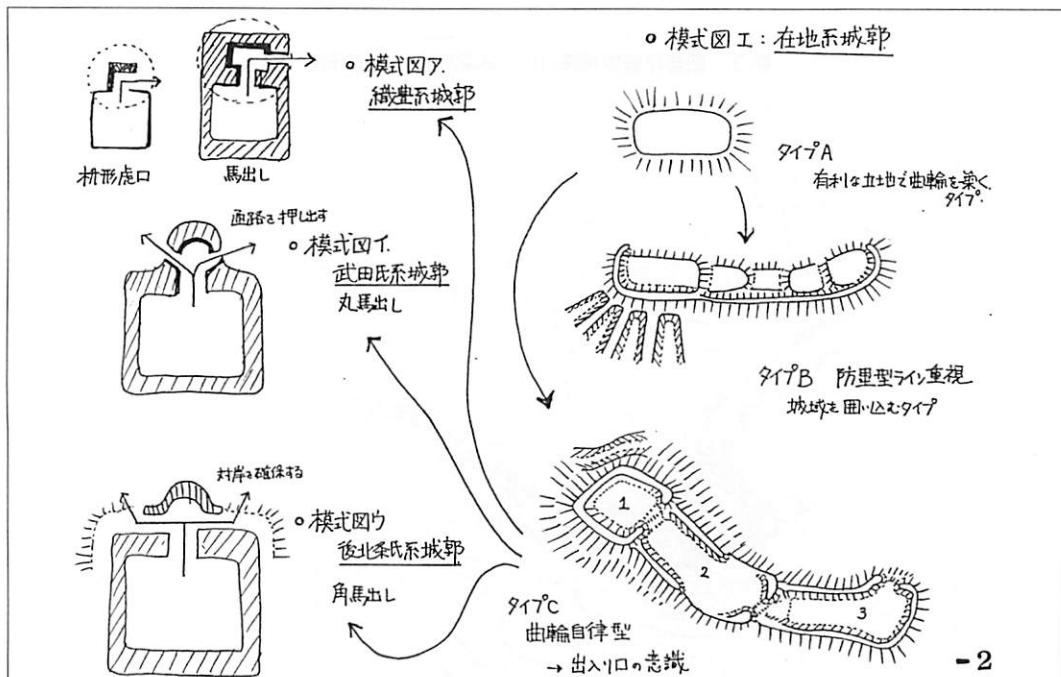


図9 繩張りからみた城郭跡の分類

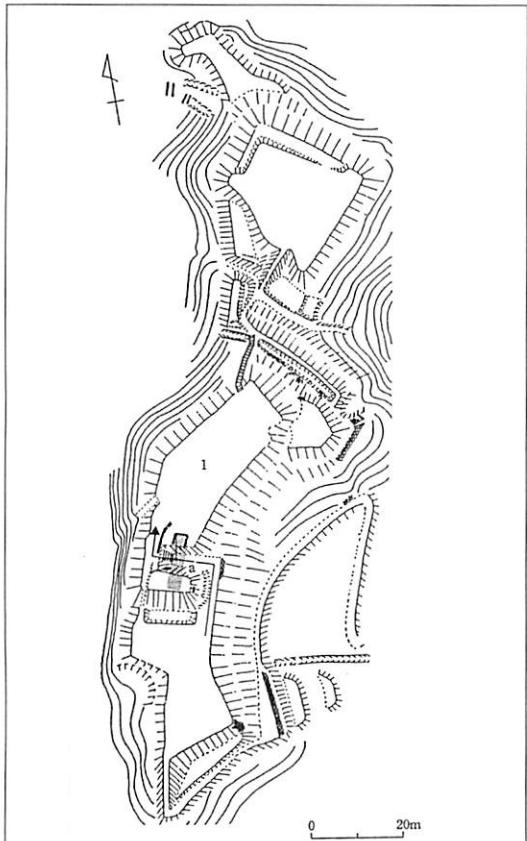


図10 近江宇佐山城縄張り図 千田嘉博：調査作図

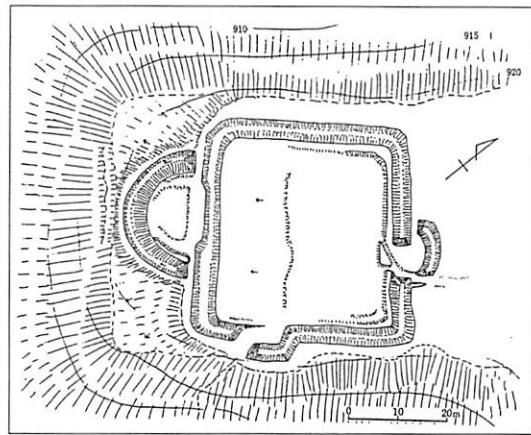


図11 信濃岩山城縄張り図 八巻孝夫：調査作図

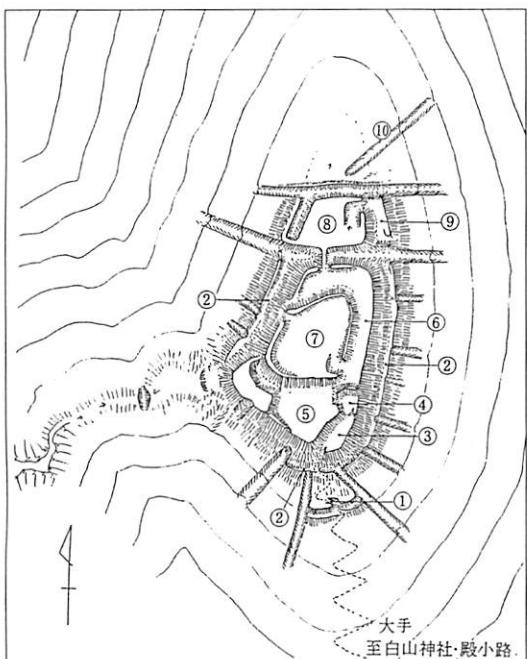


図12 甲斐白山城縄張り図 本田昇：調査作図



図13 武藏滝山城縄張り図 西股総生：調査作図

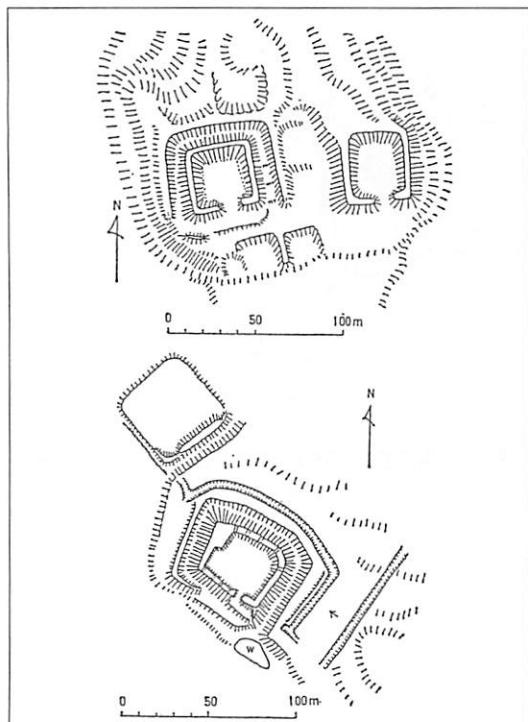


図15 伊賀の城館（挟間城・北の城、柏原城）
村田修三：調査作図

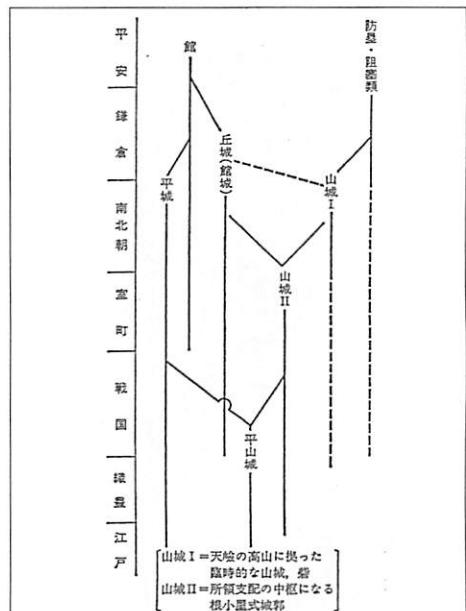


図14 中世城郭の系譜（文献[村田1984]より転載）

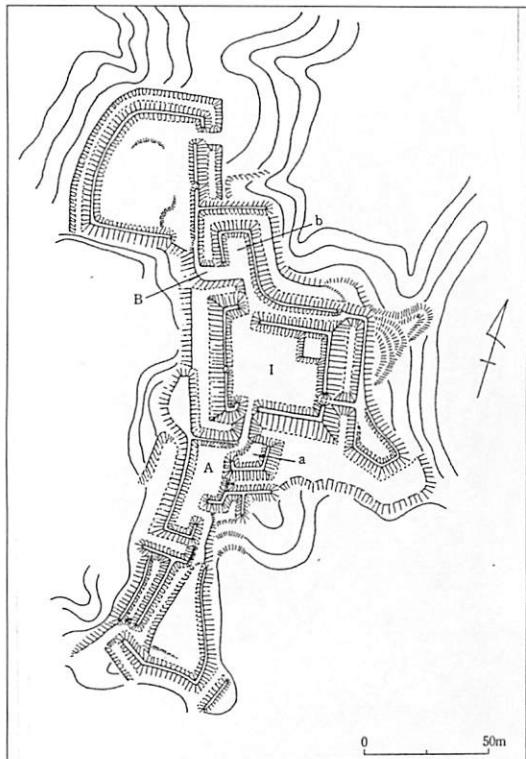


図16 近江玄蕃尾城 千田嘉博：調査作図

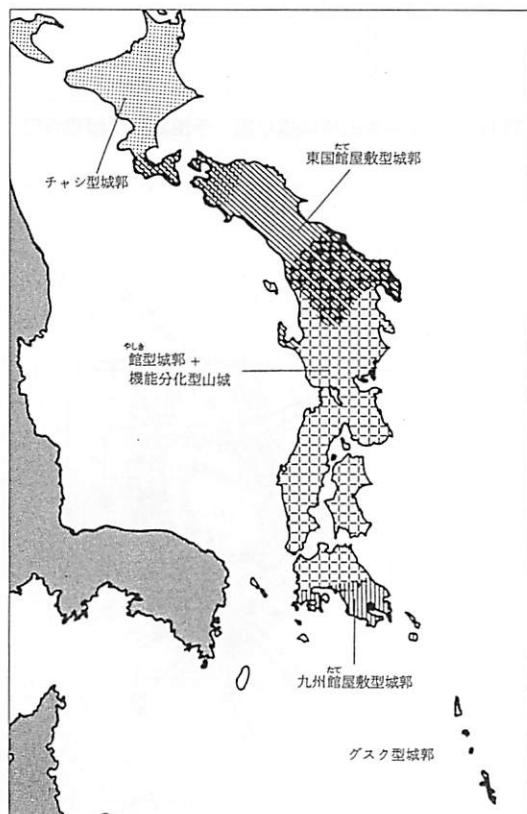


図17 戦国期城郭・城下町の地域性
(文献[千田2000]より転載)

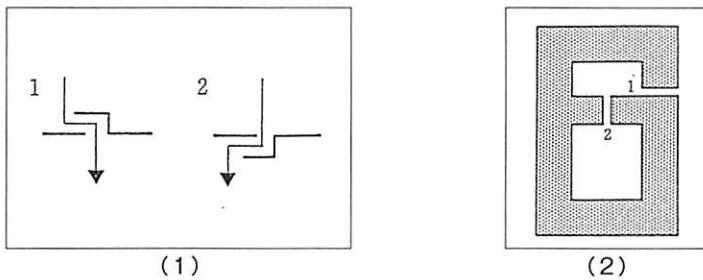


図18 外枡形(1)・内枡形(2)、馬出の概念図(文献[千田1987]より転載)

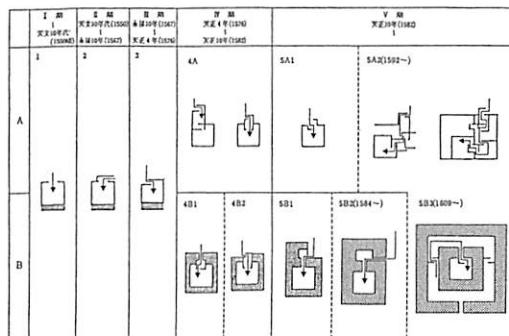


図19 織豊系城郭の編年(文献[千田1987]より転載)

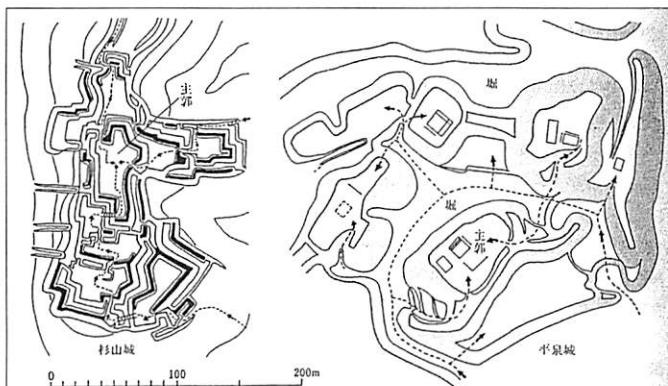


図20 中世城郭における求心型と並立型(文献[千田1996]より転載)

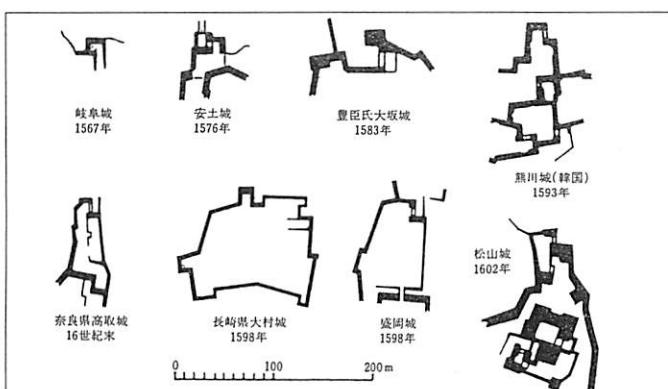


図21 主虎口形式の展開(外枡形虎口タイプ)(文献[千田1996]より転載)

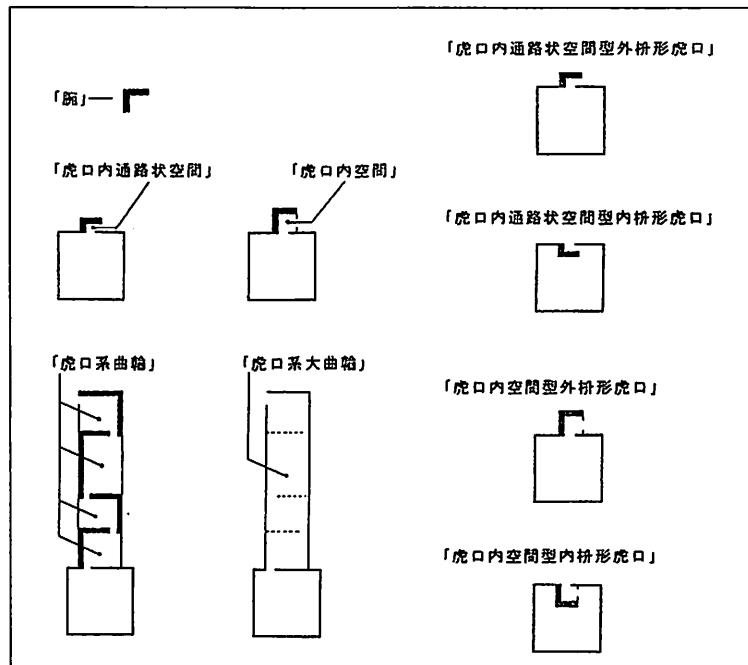
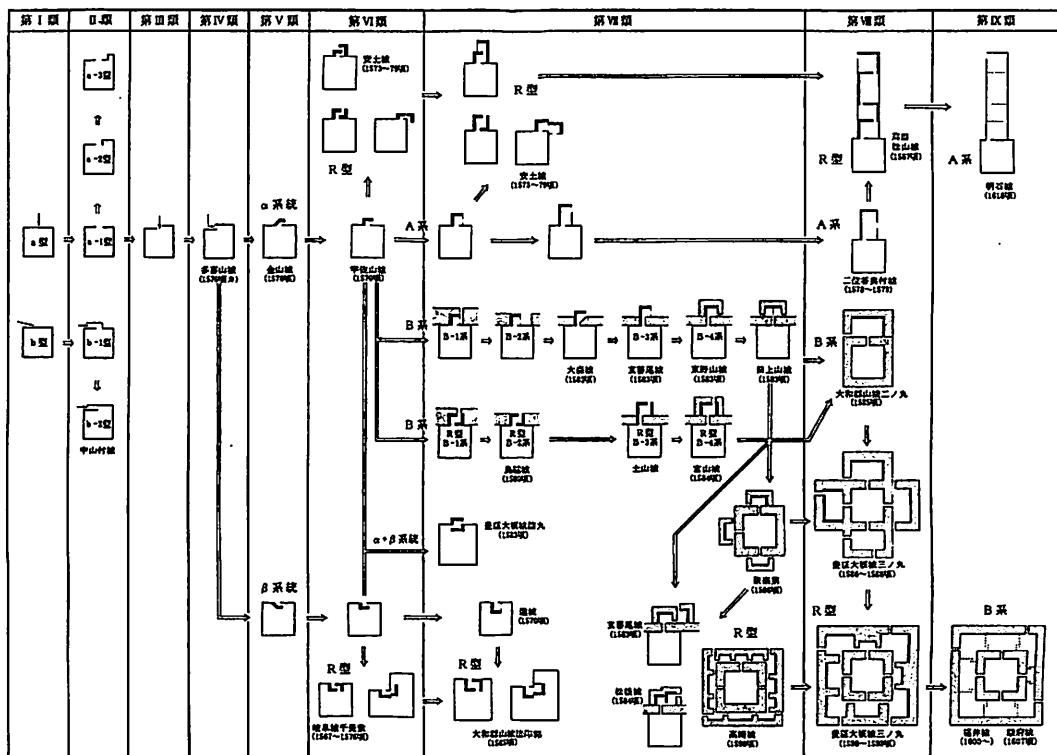


図22 織豊系城郭虎口変遷案における用語概念図（文献【木島2000】より転載）



「」は「腕」又は「腕」の形跡を示す。城名は指標として城郭である。()は大凡の推定年代である。

図23 織豊系城郭虎口変遷案（文献【木島2000】より転載）

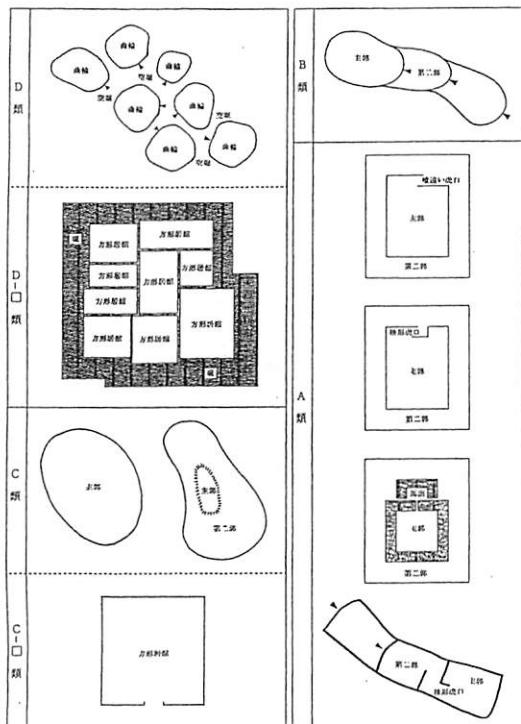


図24 《主郭への求心性》による分類モデル図
(文献 [木島1998] より転載)

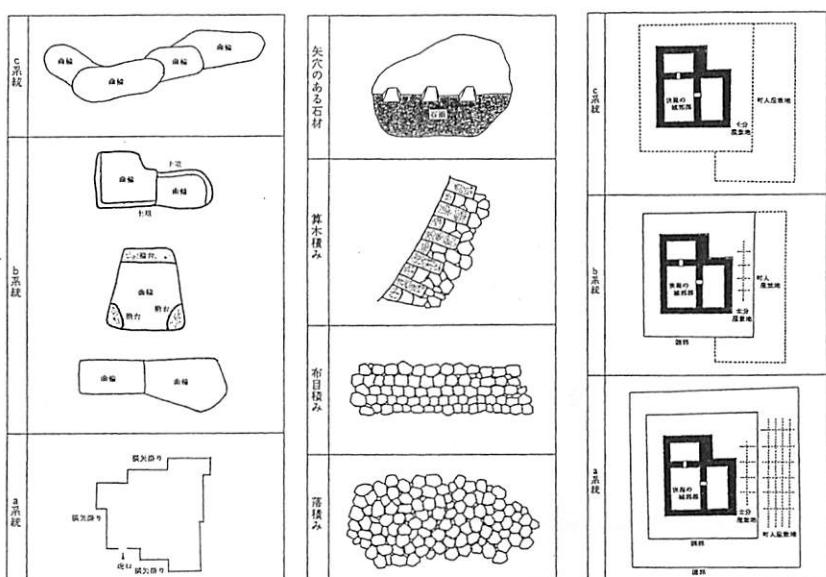
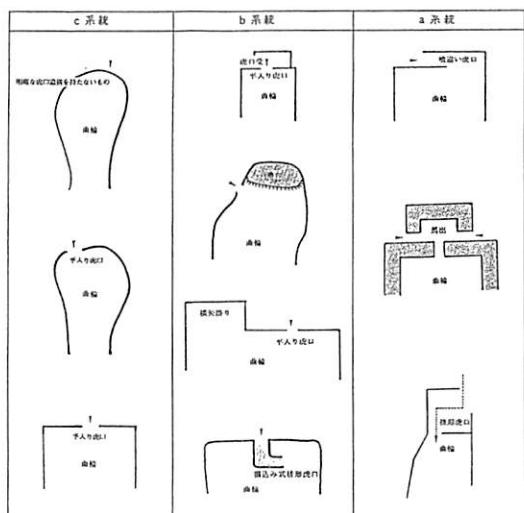


図25 《縄張り技術》による分類モデル図 (文献 [木島1998] より転載)

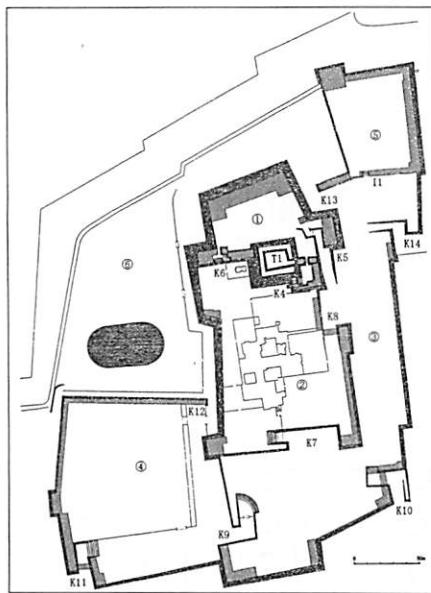


図26 筑前福岡城（主郭部）縄張り図
木島孝之：調査作図

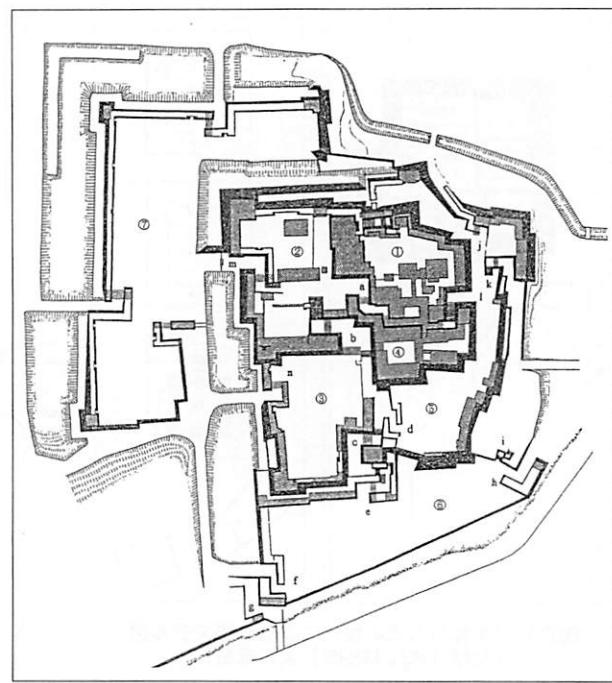


図27 肥後熊本城（主郭部）縄張り図 木島孝之：調査作図

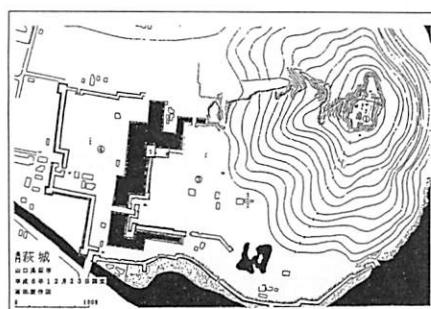


図28 長門萩城縄張り図
高田徹：調査作図

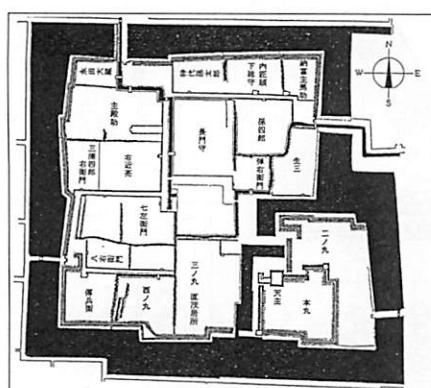


図29 肥前佐賀城（主要部）縄張り図
木島孝之：調査作図

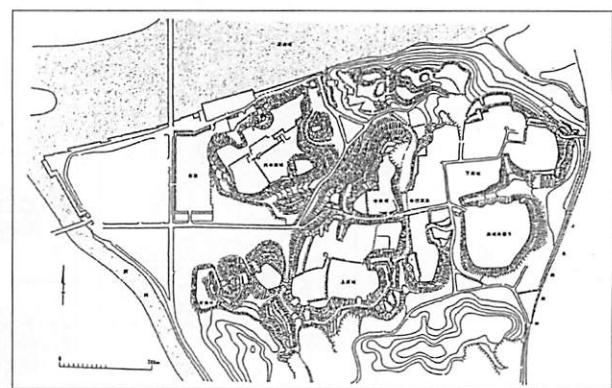


図30 肥後人吉城縄張り図 千田嘉博：調査作図

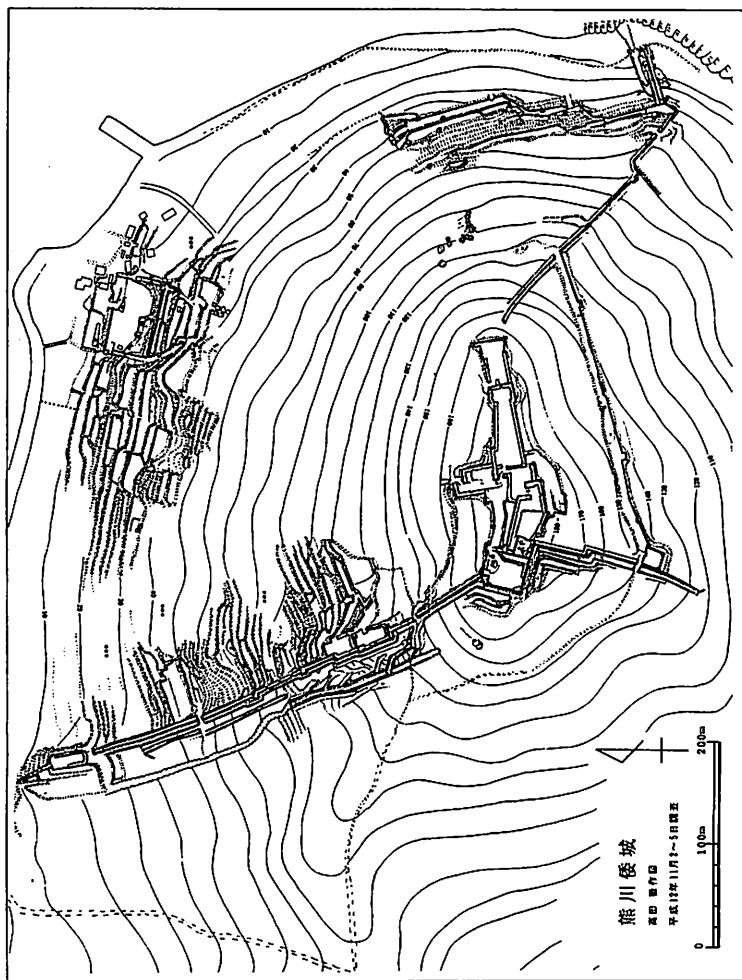


図31 倭城の縄張り（熊川倭城縄張り図 高田 徹：調査作図）

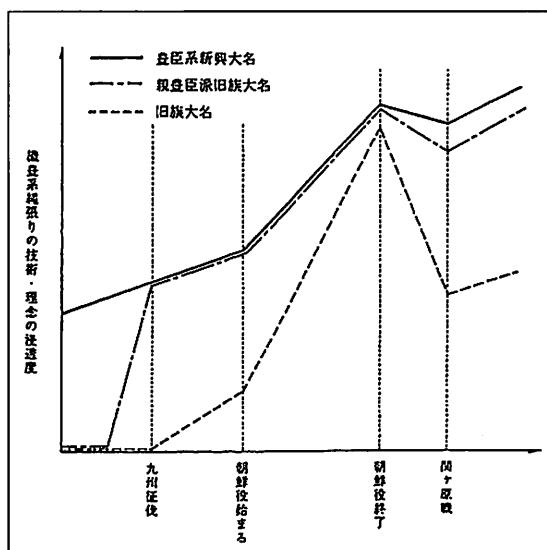


図32 織豊系縄張りの浸透状況（文献【木島1998】より転載）